



第2回

(若手技術者向け)フィールド参加型

「地域課題発見・解決力」養成研修会



報告書



平成26年11月14日-15日

(一社)建設コンサルタント協会九州支部内

九州郷づくり共助ネットワーク研究会

目次

はじめに	2
1.全体プログラム	3
2.参加者	5
3.奥雲仙田代原地位および周辺の状況	6
3-1. 概況	6
3-2. 田代原地区のミヤマキリシマ	8
3-3. ミヤマキリシマ保全活動	8
3-4. 遊々の森の概況	13
3-5. 新しいビジネス活動の流れ（情報提供）	15
3-6. これまでの課題の整理	17
4.取り上げるテーマ	20
5.Aチームの検討結果	21
6.Bチームの検討結果	25
7.Cチームの検討結果	32
8.PHOTO アルバム	39
9.若手技術者アンケート結果	42
(参考資料)PCM 手法の概要	50

はじめに

今、私達建設コンサルタントは、変化していく社会ニーズに対して、それぞれの専門技術を核としながら、自律した建設コンサルタントとして積極的に対応していくことが強く求められています。

例えば、疲弊する地域の問題について、私達自身が地域に入ってその実態を体感し、その解決策を探りだしていくと言った、「地域課題発見・解決力」とも呼ぶべき総合的な技術力を身に付けることも重要になっています。

建設コンサルタンツ協会九州支部は、夢アイデア部会活動の一環として様々な地域の地域づくりを支援してきました。

その一つである大分県豊後大野市犬飼町長谷地区を、昨年、第1回目のフィールドとして、現地の自然を巡り、現地の声を聞き、現地の人々とひざを交えながらの、「地域課題発見・解決力」養成のための若手技術者向け研修会を実施しました。

第2回「地域課題発見・解決力」養成研修会は、長崎県雲仙市田代原地区で開催しました。田代原地区は、雲仙天草国立公園の第2種特別地区に指定され、ミヤマキリシマ等の貴重な生物が生育していますが、近年、様々な環境の変化により、その生育が脅かされています。そのため地域の魅力も失われつつあり、地元では、地域活力の再生が望まれています。今回の二日間の議論の中で、かつての産業（牧畜業等）の掘り起こしや、観光地としての魅力を取り戻すこと、あわせて、環境教育の場としての活用等、多くのテーマが取り上げられました。

今回の研修会の運営においては、奥雲仙で地域の環境保全活動を進めている「NPO 奥雲仙の自然を守る会」、及び建設コンサルタンツ協会九州支部内で中山間地域を主体に地域支援活動を進めている「九州 郷づくり共助ネットワーク研究会（略称：共助研）」のメンバーが、若手技術者の方々と共に、PCM手法を活用して奥雲仙地区の問題分析・プロジェクト検討の作業を行いました。二日目は、長崎大学環境科学科の学生さんのフィールド研修とも合流し、合同討論会で意見交換を行いました。

また、現地の環境省雲仙自然保護官事務所からもご参加いただき、雲仙天草国立公園の価値や規制の意味合い、さらに、観光戦略までアドバイスをいただきました。

日頃のコンサルタント業務とは一味も二味も異なる観点と手法を用いて、地域の中で足と手と口を使いながら作業する機会を持てたことは、若手技術者の方々にとって新たな技術力として今後役に立つことは間違いありません。

(一社) 建設コンサルタンツ協会九州支部内
九州 郷づくり共助ネットワーク研究会
会長 針貝武紀
同 会員一同

1. 全体プログラム

初日 11月14日(金)		
9:00	建コン協会ビル前集合・出発 途中、トイレ休憩	
11:30	奥雲仙田代原（研修室）到着	
11:30	研修会開始（オリエンテーション） ・開会あいさつ ・地域概要紹介 ・国立公園制度と雲仙天草の価値 等	研修室にて（進行：矢ヶ部） 共助研（波木）、NPO（中田） NPO（中田） 環境省（岸田）
12:30 13:30	昼食（地元の食材で調理された弁当）	自己紹介タイム 兼 （進行：矢ヶ部）
13:30	チーム分け 現地視察 研修室⇒上田代原⇒トレイルセンター ⇒遊々の森⇒（岩戸神社等）⇒研修室	地区内を車で視察 次頁参照 （ ）：Cチーム
15:00	グループワーク（ステージ①問題分析） ・PCM 解説 ・中心問題設定/問題分析 ステージ①終了	3チーム編成（進行：矢ヶ部） 共助研（木寺）
17:30	（移動、休憩・入浴・懇親会準備等）	
18:30 20:30	懇親会開始 懇親会終了 （適宜、就寝）	地元の方々との流（進行：山下） 旅館（松栄）泊

2日目 11月15日(土)		
7:00	全員起床	旅館（松栄）
7:30	朝食	
8:00	移動（武家屋敷 見学）	
9:00	グループワーク（ステージ②目的分析） ・「地域づくりの新しい手法」解説 ・目的分析討議 ・プロジェクト検討討議 ステージ②終了	研修室（進行：矢ヶ部） 共助研（金尾）
10:30	「遊々の森」保全活動 ガイダンス *長崎大学環境科学科学生と合流 中川先生+TA+学生 27名 ・現地の概況説明 ・進め方の説明	研修室 NPO（中田、木田） 共助研（矢ヶ部）
11:00	「遊々の森」保全活動 現地活動 （草刈除草 等）	下田代地区
12:15 13:00	昼食	研修室
13:00	全体討論会（ステージ③成果発表） ・各チーム発表 10分+質疑 10分 ・講評	研修室（進行：矢ヶ部） NPO、長崎大学、共助研
14:30	研修会終了	
14:30	奥雲仙発	
18:00	建コン協会ビル前着・解散	

現地視察(フィールド調査)

視察コース (A、B チーム)：研修室⇒上田代原⇒トレイルセンター⇒遊々の森⇒研修室

視察コース (C チーム)：研修室⇒上田代原⇒トレイルセンター⇒遊々の森⇒岩戸神社⇒研修室

13:30 研修室出発	A、B チーム	C チーム
13:30-13:50 上田代 ミヤマキリシマ生育地 (放牧されている牛)		
13:50-14:10 トレイルセンター		
(A,B チーム) 14:10-14:25 トレイルセンター隣接のキャンプ場		
(A,B チーム) 14:25-14:50 「遊々の森」 2日目の草刈除草活動現場		
(C チーム) 14:10-14:50 岩戸神社 周辺施設		
15:00 研修室到着		

2. 参加者

●若手技術者参加者


松浦 琢	国際航業 九州支社
竹 翔太郎	第一復建
濱崎 瑛貴	福山コンクリート
岡本 直也	八千代インジニアリング 九州支店

●研修会運営・アドバイス参加者

NPO 奥雲仙の自然を守る会	
中田 妙子	会長
柴田 鹿吉	
木田 智	事務局
NPO 会員	江副詔子、伊藤博之、戸田博朗、三浦尚俊、入口仁美、松崎英寿、荒木輝也、古賀正明、本田昭子、山口重満
地元	岩崎幸子、寺田勝子、本田せつ子、江副光義、本田政子、伊藤スミコ、松永洋介、坂本弘樹（市議会議員）、山本凱和、生田宗豊（JA）、林田益太郎、桑田博文、山中秀昭（百花亭）、中川和美（松栄旅館）
環境省九州地方環境事務所雲仙自然保護官事務所	
岸田 宗範	自然保護官（アドバイザー）
瀬戸口 美季子	自然保護官（アドバイザー）
長崎大学	
中川 啓	水産・環境科学総合研究科教授
TA・学生	同 27名
九州 郷づくり共助ネットワーク研究会	
波木 健一	研修会総括責任者（事務局長）
矢ヶ部 輝明	プロジェクト責任者（A）
山下 建郎	プロジェクト副責任者（B）
松尾 敏彦	プロジェクト副責任者（C）
木寺 佐和記	
波多野 健志	
前田 武	
金尾 俊郎	地域支援アドバイス（2日目のみ）

3. 奥雲仙田代原地域および周辺の概要

3-1. 概況

奥雲仙の田代原地区は、島原半島のほぼ中央部に位置する。行政界としては旧国見町に属し、現在は、雲仙市国見町で、一部、千々石町に所属する。(下図  の位置)

現在は、田代原地区には、6戸の民家があり、牧場管理、森林管理等の仕事を行っている。また、「NPO 奥雲仙の自然を守る会」の拠点でもある事務局および妙寿院がある。

田代原地区周辺の地形は、南側には、標高 1062m の九千部岳が、また、北側には、吾妻岳(標高 869m)、鳥甲山(標高 822m) の山々に囲まれた、標高 620~630m ほどの盆地上の場所で、平地とは約 5 度程度の温度差がある。また、田代原地区は、集落・キャンプ場・牧草地でもある「田代原(上):通称 上田代」と、遊々の森(注:後程説明)として指定されている「田代原(下):通称 下田代」に分かれている。

田代原地区は、日本初の国立自然公園である雲仙・島原国立公園の第2種特別地区に指定されており、貴重で豊かな自然環境に恵まれているとともに、地域の牧畜産業支えてきた牧野環境としても固有の環境を形成している。平成 17 年 11 月に策定された「雲仙天草国立公園雲仙地域管理計画書」には、田代原地区の保全方針として、「ミヤマキリシマが点在するシバ草原の維持に努める」「環境学習にふさわしい場となるよう保全に務める」と記載され、固有の自然環境の保全と活用が示されている。(参考資料 1) なお、田代原地区は、世界ジオパークに日本初で認定された島原ジオパークにも属し、千々石断層の隆起により生じた盆地帯であり、地質的にも非常に稀有な場所である。



NPO 奥雲仙の自然を守る会においても、ジオパークにおける指導員である寺井氏による講義をおこなう等、これらの固有の環境の魅力を知ってもらう活動を行っている。このような活動は、一般的なエコツーリズムで行われているような家族・一般市民の各団体等を対象にしたものに加え、地質の専門家等のスペシャリストの団体にとっても極めて魅力的な活動と考えられる。

島原半島は、雲仙温泉や小浜温泉、島原城や島原城下町等、日本でも有数の観光地域であるが、田代原地区は、それらの観光地とも車で 30 分程度の近い位置にある。また、著名度は低いものの、国見の神代小路や、岩戸神社等の魅力ある観光スポットや、地域で独自のエコ活動を行っている「やまぼうし工房」等の施設が隣接する。田代原地区へは、諫早市内から車で約 40 分、長崎市内から約 1 時間半、福岡市内からは、高速道路を利用して約 3 時間半程度の距離である。



ジオパークに関する講義風景

(参考) 神代小路の武家屋敷、岩戸神社、

◆佐賀鍋島藩の支藩、神代小路（こうじろくうじ）地区：鍋島邸を中心とした神代小路地区は古いまちなみがほぼ現存武家屋敷跡が残存し、平成17年7月に国の重要文化財「重要伝統的建造物群保存地区」（伝建地区）に指定される。長崎県では、長崎市内南山手と東山手の洋館群に次いで3ヶ所目。



◆古来から、島原半島と佐賀方面を結ぶ海上交通の要衝であり、神代氏が治めていました。16世紀後半、龍造寺氏とともに神代氏は歴史から姿を消し、以後明治に至るまで佐賀鍋島藩の神代領となりました。

◆4代目領主・鍋島嵩就（なべしまたかなり）が17世紀後期に城跡の周囲の川や田を埋め立てて築造しました。現在も江戸時代の地区割りがほぼそのまま残されており、水路・生垣・石垣など多くの遺構が調和と整然の美しさを保っています。江戸情緒を味わうことができ、ゆったりとした時間が流れているような雰囲気がある。



岩戸神社



やまぼうし工房



やまぼうし工房



陶芸作品の数々



作品の花弁に飾られた草花



染織作品の数々

3-2. 田代原地区のミヤマキリシマ

観光地・避暑地として著名な雲仙地域には、その特有の高原環境に生息するミヤマキリシマが生息することでも名を知られている。特に、仁田峠のミヤマキリシマは、毎年5月になると多くの観光客で賑わう（右写真）。

雲仙のミヤマキリシマは、仁田峠だけでなく、奥雲仙田代原のミヤマキリシマも、非常に固有の環境の中で生息する貴重種として知られる。

かつては、地域の小中学校の遠足の場として、頻りに訪れる場所であったといわれる田代原のミヤマキリシマの生息地は、牧野という生業のなかで生まれた環境に対応すべく、宿命づけられた貴重種であったといえる。

戦前より馬あるいは牛の放牧地であった田代原は、かつては、周囲一帯が、駅馬の放牧地として、阿蘇同様の特有の草地景観を呈していた。この草地環境は、数多くの牛が日頃の餌場としていたことで維持されていた環境であったが、近年、放牧されている牛の数が減少し、草地がアカマツ林へと移っている現象が顕著に見られる。そのため、天然記念物でもあるミヤマキリシマの生息域が減少している。

現在は、牛（種牛）の放牧地として、約50ha程度の草地が牧野組合の管理のもとにある。しかし、近年、さらに放牧の牛の数が激減したことが要因となり、これまで草地環境であった場所をも、藪（ブッシュ）に、さらには、アカマツが侵入しており、牧野すなわち草地環境から樹林化が進んできた。その影響で、ミヤマキリシマは、さらに急速に生育場所を追われつつある。

もともと、人手の入った環境においてその草地環境という生息環境は維持されてきたが、放牧されている牛の数が激減すること、つまりは、人手が入らなくなることで、環境が変化することは当然のことといえる。人手がかけられなくなった里山が荒廃することと同じことといえる。

しかし、田代原地区が、雲仙国立自然公園の第2種特別区域に指定されていることもあり、自然公園区域では、自然のまま人手をかけてはいけないという間違った理解が先行することもあり、保全ではなく放棄されていることで、自然公園としての価値さえも危うくなっている。

3-3. ミヤマキリシマ保全活動

このような状況に危機感を抱いた、地元田代原の住民は、平成17年に「NPO 奥雲仙の自然を守る会」を立ち上げ、ミヤマキリシマの保全運動を開始した。が、自然公園区域の中の活動という特殊事情からくる様々な制約に対して、関係者や周辺の理解を得る活動からはじめることを余儀なくされている。

それでも、いくつかの環境助成事業から採択され、資金的な支援を受けながら活動を続けている。しかし、限られた人手、資金の中では、自然の遷移の速さに追いつけず、草地環境は次々と姿を消



し、アカマツ林と変わってきつつあり、地元では、強い危機感を持っている。

かつては、春はミヤマキリシマの大群落がのんびりと草をついばむ馬や牛のなかで咲みだれる風景が広がり、夏はキャンプ場として、秋は、紅葉狩りに、冬は、霧氷が見られる場所として、一年中、美しい景観が見られる場所であったという田代原の魅力・価値が、急速に失われつつある。

ミヤマキリシマ保全活動の区域は、現在は、奥雲仙田代原地区の第1群生地を対象としている。

第1群生地には、現時点でも、草地環境に群生するミヤマキリシマを見ることができるが、その生息範囲はしだいにアカマツ林に浸食されつつある。

なお、区域の中央を、かつては坂本龍馬も通ったという街道跡が残っている。この街道跡を地元では「殿様街道」と呼んでいる。



第1群生地：奥雲仙田代原の玄関口（エントランス）機能を持つ場所でもあり、優先した保全活動を展開する必要がある区域

第2群生地：第1群生地と同様に、まとまったミヤマキリシマの生育が見られる場所であり、トレイルセンターやキャンプ場にも隣接している区域

2004年4月撮影



2013年1月撮影



(参考資料) 平成 17 年 11 月に策定された「雲仙天草国立公園雲仙地域管理計画書」より

第3 管理の基本的な方針

1 保護に関する方針

(1) 保全対象及びその保全方針

第2に記載した当管理計画区の概要を踏まえ、このような特性を有する雲仙の自然を将来に渡って良好な状態で残していくため、以下のとおり代表的な風致景観を保全対象に定め、その保護管理に努めるものとする。(資料2 保全対象位置図)

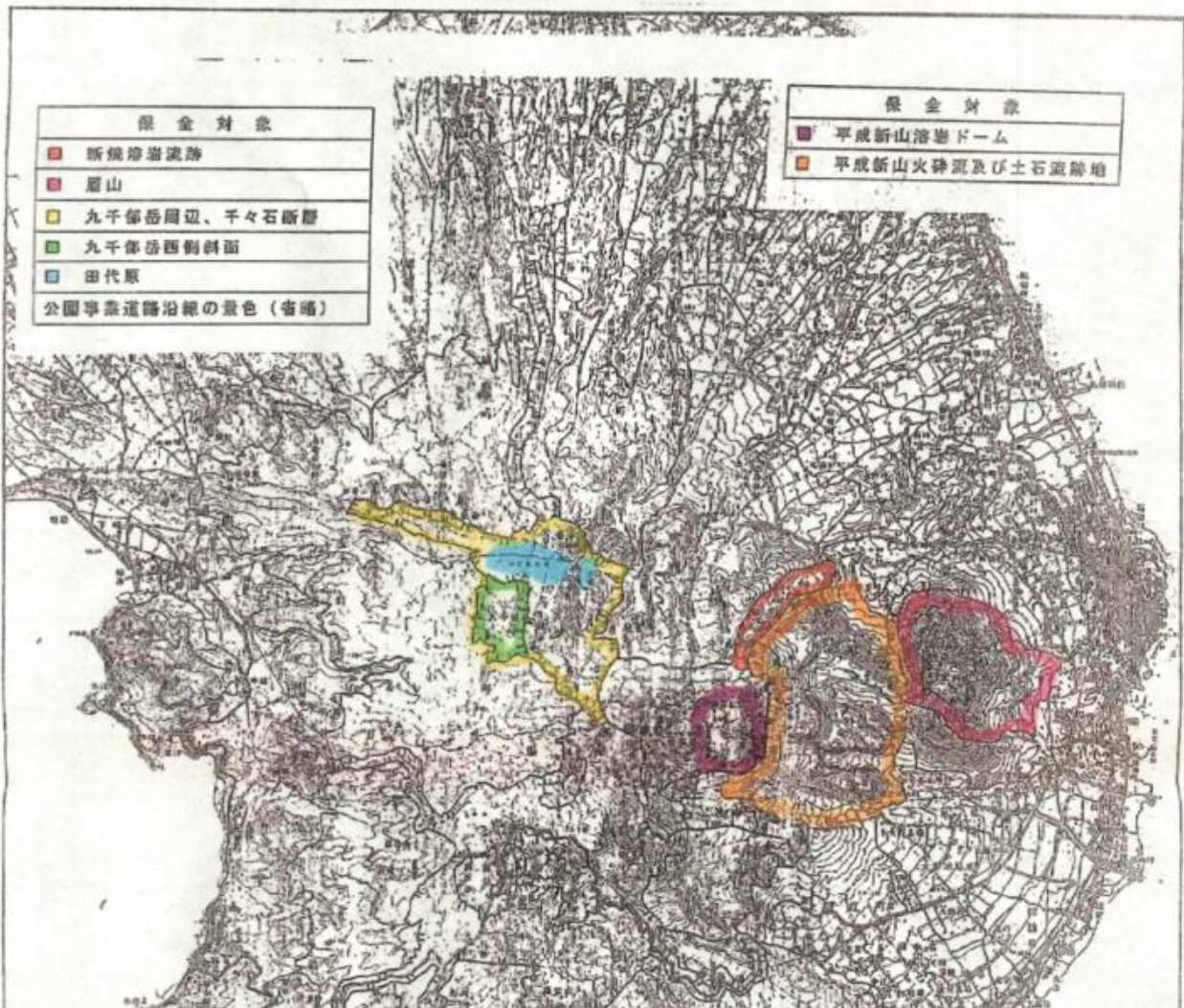
保 全 対 象 (地種区分)	概 要	保 全 方 針
田代原 (第2種特別地域)	田代原は千々石断層により形成された盆地であり、九千部岳や吾妻岳を間近に望むことができる。 長年の牛馬放牧の慣習と影響のもとでシバ草原(シバゲンノショウコ群集)が広がっており、その中にミヤマキリシマが点在する。 トレイルセンターや野営場施設等環境に配慮された施設が整備されている。	田代原の景観要素の一つとなっている牧場風景や、放牧によりミヤマキリシマが点在するシバ草原の維持に努める。 環境学習にふさわしい場となるよう保全に努める。

(2) 重要な風致景観の保護のための事業の実施方針

ア ミヤマキリシマ群落

雲仙を代表する植物であるミヤマキリシマは雲仙地域の各所に分布しているが、特に仁田峠、池ノ原、宝原には大きな群落が見られる。ミヤマキリシマは陽性植物で、上部を他の植物で覆われると著しく活力が低下する。仁田峠、池ノ原、宝原等は潜在的には森林となる場所であるので、ミヤマキリシマ群落を維持するためには他の木本類及び草本類を抑制する必要がある。現在、仁田峠、池ノ原及び宝原の3地区については長崎県雲仙公園事務所や自治会(雲仙を美しくする会)と、国有林においては林野庁長崎森林管理署と連携しつつ、秋にススキ等の下草を刈り取っている。しかし、仁田峠ではモミ等の低木及びつる性植物が目立っており、池ノ原や宝原ではアカマツ等がミヤマキリシマを覆い始めている。この3地区については専門家の意見を聴きながら、引き続き下草の刈り取り及びミヤマキリシマ群落の生育に支障となる樹木の排除等、ミヤマキリシマ群落の保護及び育成のための対策に協力する。

保全対象位置図 (2/3)



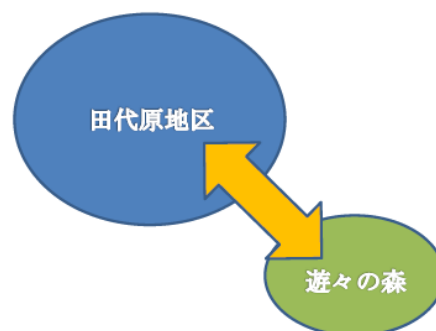
資料1 : 「雲仙天草国立公園 雲仙地域管理計画書 (H17. 11) : 九州環境事務所」より抜粋

3-4. 遊々の森の概要

ミヤマキリシマ保全活動を行っている田代原（上）地区には、隣接して約10haの牧野があるが、平成22年に、この地区を田代原（下）地区を「遊々の森」として指定し、長崎県初の森林環境教育の場として、九州森林管理局長崎森林管理署、雲仙市、島原雲仙農業協同組合と、奥雲仙の自然を守る会の4者間で、「奥雲仙牧場の森」の協定を締結した。今後は、多様性にとんだこの豊かな森林環境を、子供たちの森林教育の場として活用する場と位置付けられた。

しかし、「遊々の森」に放牧されていた約20頭の牛は、昨年の平成26年3月以降、別の場所に移動してしまい、現在は、放牧は行われていない。このため、田代原（上）地区と同様に、アカマツ林への遷移が一気に進み、現在の牧野環境（草地環境）は、消失してしまうことが危惧されている。

そのため、NPO 奥雲仙の自然を守る会では、田代原（上）地区のミヤマキリシマ保全活動のエリアと一体的に保全整備活動を行うことで、同様の牧野環境を今後も維持し、環境教育活動拠点として活用していくべく、巣箱掛け、下草刈等の環境保全活動を行っている。



園児が着色した巣箱



「遊々の森」奥雲仙牧場の森

「遊々の森」における活動の方針として、次の活動を上げている。

- 恵まれた森林（日本初の国立公園）や、地質（日本初のジオパーク認定）等の自然環境の素晴らしさを学ぶこと
- 森林整備の重要性について学ぶこと
- 地域（地元）の素晴らしさや有難さを学び、それを外に向かって発信すること。

平成 26 年 5 月には、下記に示す要望書を長崎県教育長へ提出し、現在の活動を継続・発展していくために、これらの活動への支援要請を行っている。

平成 26 年 5 月 9 日

長崎県教育長 殿

「遊々の森」における教育学習の場としての利用の要望書
(奥雲仙田代原地区の自然保護活動と利用へのご協力・ご支援依頼)

記

観光地・避暑地として著名な雲仙地域には、その特有の高原環境に生息するミヤマキリシマが生息することでも名を知られています。特に、仁田峠のミヤマキリシマは、毎年 5 月になると多くの観光客で賑わいます。しかし、仁田峠だけでなく、奥雲仙田代原にもミヤマキリシマが固有の環境の中で生息しています。ここ田代原地区は、雲仙国立自然公園第 2 種特別区域に指定され、「ミヤマキリシマが点在するシバ草原の維持に努める」「環境学習にふさわしい場となるよう保全に務める」と明記されています。

また、田代原地区は、世界ジオパークに日本初で認定された島原ジオパークにも属し、千々石断層の隆起により生じた盆地帯であり、地質的にも非常に稀有な場所でもあります。

かつては、地域の小中学校の遠足の場として親しまれていた田代原のミヤマキリシマの生息地は、牧野という生業のなかで生まれた草地環境を基盤として、その生息を可能としてきました。

しかし、牧野を取り巻く環境が変化し、放牧牛の数が激減したことが要因となり、これまで草地環境であった場所が、藪に、さらには、アカマツが侵入することで、草地環境から樹林化が進んでおり、ミヤマキリシマは、急速に生息場所を追われつつあり、貴重な生息環境が失われつつあります。

このような状況に危機感を抱き、平成 17 年に「NPO 奥雲仙の自然を守る会」を立ち上げ、ミヤマキリシマの保全運動を、自然公園区域の中の活動という特殊事情のなかで活動を続けてきました。

また、平成 22 年には、田代原地区に隣接した約 10ha の牧野を、長崎県初の森林環境教育の場として「遊々の森」として指定していただき、九州森林管理局長崎森林管理署、雲仙市、島原雲仙農業協同組合と、奥雲仙の自然を守る会の 4 者間で、「奥雲仙牧場の森」の協定を締結しました。今後、多様性とんだこの豊かな森林環境を、子供たちの森林教育の場として活用することとしています。

しかし、ここ「遊々の森」に放牧されていた約 20 頭の牛も、現在は、別の場所に移動しており、隣接する田代原と同様に、今後、アカマツ林への遷移が進み、現在の草地環境は、消失してしまうことが危惧されます。そのため、現在のミヤマキリシマ保全活動と一体的に保全整備活動を行うことで、同様の草地環境を今後も維持し、環境教育活動拠点として活用していくことが必要になってきています。

この自然公園区域における貴重な自然環境を守るため、次世代を担う子供たちへの環境教育フィールドとして教育現場で周知していただき、今後、さまざまな自然教育の現場で「遊々の森」を活用していただきたく、ご協力、ご支援をお願いする次第です。このような環境教育活動を背景に、私どもは、ふるさととの自然と暮らしについて、“現状を見据え”、“改善方法を考え”、“実現に向かって行動する”という学びの流れを生み出す教育・学習活動につながっていく活動を継続していきたいと考えます。

以上

(特定非営利活動法人) 奥雲仙の自然を守る会代表 中田妙子

3-5. 新しいビジネス活動の流れ（情報提供）

近年、「ソーシャルビジネス」という新しい事業展開の概念が生まれてきている。

ソーシャルビジネスとは、地域社会において、環境保護、高齢者・障がい者の介護・福祉から、子育て支援、まちづくり、観光等に至るまで、多種多様な社会課題が顕在化しつつある現在、このような地域社会の課題解決に向けて、住民、NPO、企業など、様々な主体が協力しながらビジネスの手法を活用して取り組むのが、ソーシャルビジネス（SB）／コミュニティビジネス（CB）といわれている。このSB／CBの推進によって、行政コストが削減されるだけでなく、地域における新たな起業や雇用の創出等を通じた地域活性化につなげることを目的としている。

田代原地区における今後の活動において、この新しい事業手法についても理解しておくことが望まれると思われる。以下、関連する資料を掲載する（資料提供：金尾俊郎氏）。

CSRとクラウドファンディング

1) 中小企業のCSR

CSR（corporate social responsibility）を、以前は「企業の社会貢献」のように捉えた時期もありましたが、現在は文字通り「企業の社会的責任」と解釈されるようになりました。同時に、従来、大企業が意義のある社会活動を支援することにより、企業イメージを向上させ、結果、業務実績を上げることだったものが、従業員数名の中小企業であっても、社員が顧客の要望等を共有し、業務を通じて顧客満足を得、社員のやる気と共に業績を上げるということに変わって来たのです。こうなると、「社会貢献」と「社会的責任」の意味合いも近くなり、CSRが単なる「大企業の寄付行為」から、中小企業や地域組織が、顧客（住民）満足と社員（スタッフ）の意欲向上と企業（組織）の業績改善の「三方良し」の発想に進化してきたことになるのです。

2) 資金調達とPR効果（crowd funding）

クラウドファンディングは、組織や個人がインターネットを介して不特定多数の人々から、5,000円、10,000円という概ね少額ずつの事業（活動）資金を調達する手法です。新規事業等の発案者は群集との仲介役である「プラットフォーム」を通じて事業（活動）内容を提示し、その発案に賛同する人々が出資することになるので、当然、社会的意義の有無や個人の関心に共感を得ることが必須となります。基本的に配当は不要ですが、出資の「見返り」も、出資者の「自己満足」から事業で得られた成果物の一部までとアイデア次第なのです。

昨年度より開始された、中小企業庁の運営する「ミラサポ（未来型企業応援サイト）」によると、NPO法人や個人が、30万円～100万円という少額の活動資金調達が目標のように思われていた我が国のクラウドファンディングも、中小企業の新規事業資金調達の手段と見做されるようになり、大阪府の豊中商工会議所などは、会員企業の資金調達方法にクラウドファンディングを勧めるようになっていました。「ミラサポ・ビジネススクール」
<http://www.mirasapo.jp/features/school/vol4/index.html>

「環境とCSRの専門誌・オルタナ」<http://www.alterna.co.jp/>を主宰する森撰さん（元日経新聞LA支局長）によると、クラウドファンディングは、意識の高い人たちが見るのでそのPR効果も高く、資金調達のみならず活動の同志を募ることにもなると。また、鎌倉市など行政も事業資金調達にこのシステムを活用するようになってきました。そして、国も26年5月に金融商品取引法を改正し、出資額が1人1件50万円を上限とし、総額最高1億円までの資金調達がクラウドファンディングで可能となりました。（平成27年度施行）安易に補助金に頼るより、事業の組み立て過程で得られる自らのスキルアップにも繋がりますね。

3-6. これまでの課題の整理

1) ミヤマキリシマ保全活動に関する課題

奥雲仙田代原地区におけるミヤマキリシマ保全活動として、これまで、公園区域内の市道の清掃等の環境保全活動を継続的に行いつつ、当会の施設を拠点に、滞在型・地域貢献型のエコツアーリズムの活動を行ってきた。しかし、前述したような歴史的な背景および国立自然公園第2種特別地区という制度的な制約により、次のような課題を抱えている。

- 当地域は、自然公園区域第2種特別区域であるとともに、牛の放牧地として牧野組合の管理地となっているため、自然公園区域としての制約を受けるとともに、牧野としての環境を維持する必要がある。
- 牧野としての管理は、牛の放牧地の維持のために行われるが、ミヤマキリシマ等の固有の環境の保全については、特に、注意が払われている管理が行われているわけではない。
- したがって、牧野の管理とミヤマキリシマの維持のための管理が共通でともに必要な効果が発揮されていた時までは、特に問題は起きなかったが、牛の頭数が減少するに従い、牧野の管理のみでは、ミヤマキリシマの保全が図られない事態となっている。
- そのため、ミヤマキリシマ保全を目的とした下草刈り等の管理を行うべく、NPO等が活動を行ってきたが、一般的な自然公園区域内の制約があると指導される等、十分なミヤマキリシマ保全の管理ができていない状況になっている。
- 日本初のジオパークに指定された場所で、断層角盆地としての地層を形成している場所でもあり、教育的なフィールドとしての価値を有するとともに、パワースポットとしても注目される資源を有している。
- 地質的な特性以外にも、歴史的な資源（殿様街道等）や、教育文化財も豊かで、様々な学習が可能な場所となっている。また、固有で良好な自然環境は、癒しの場として、また、自然体験の場として、より身近で利用価値の高い地域として再生していくことを可能としている。
- これら地域の再生のキーポイントが、「ミヤマキリシマの再生：牧野におけるミヤマキリシマの景観の復活」であり、そのための継続的なミヤマキリシマの保全活動である。

これらを踏まえた現状の課題を、次のように集約することができる。

継続的な活動が必要 ⇒ 人的、資金的安定性の確保

- 保全活動の目標の明確化：保全活動参加者・支援者の理解を得るため
- 魅力ある活動メニュー：継続的な参加を維持するため
- 行政の支援：公的な活動としての位置づけ、円滑な活動の確保
- 若者の参加：長期的な（次世代への）活動の確保、柔軟な発想力・情報発信力

2) 遊々の森の保全・利活用に関する課題

田代原（下）地区の「悠々の森」における保全・利活用の方向性については、田代原（上）地区との連携や一体的管理・利活用を考慮することが望まれる。

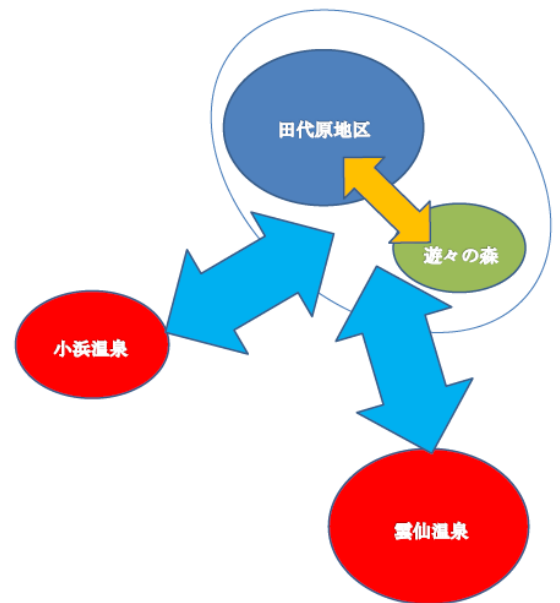
これまで、NPO 奥雲仙の自然を守る会では、次のような活動提案を考えている。

- 次世代を担う子供たちへの環境教育フィールドとして活用する。そのため、森林管理署による出前講座、森林保全体験（木こり体験、下草刈体験 等）、巣箱かけ・巣箱づくり、自然観察会、植樹体験、シオ学習会、絵画教室、生け花教室などの機会を提供する。
- 「遊々の森」の魅力を高めるために、田代原地区と同様なミヤマキリシマ群生地を創出する。そのために、ミヤマキリシマの移植を行うとともに、ミヤマキリシマの生息を維持するために下草刈り等の活動を行う。
- ミヤマキリシマの移植の際は、「1株オーナー制度（例：一株 5,000 円）」の導入も検討する。なお、植樹体験の時期は、3月から5月の期間になるものと考えられる。
- ミヤマキリシマのみならず、「ヤマボウシ」の開花期には、山一面が美しく広がるが、「ヤマボウシ」についても着目した保全整備を行う。
- 長崎大学等の学術機関による研究フィールドとして活用してもらうよう働きかけを行う。例えば、「自然公園区域における里山的な環境保全活動の在り方について」「自然公園区域における地域おこしの手法について」等。

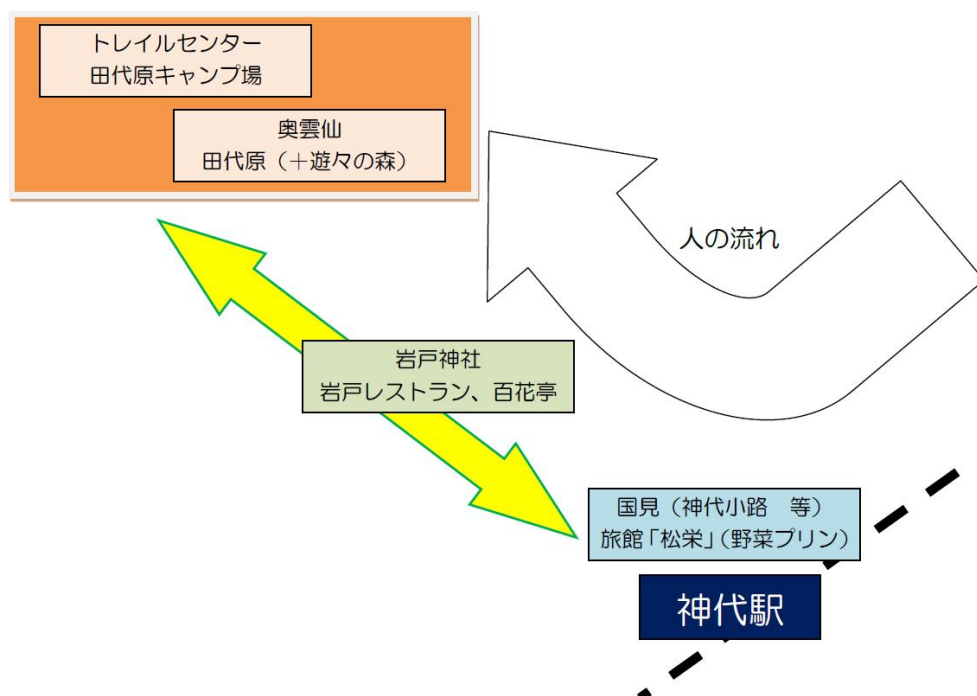


3) 田代原地区と周辺施設等との連携に関する課題

奥雲仙田代原地区においては、一般市民や専門家集団を対象としたエコツーリズムのフィールドとして、周辺の関連施設と連携することが考えられる。特に、近接する「雲仙温泉」「小浜温泉」等との温泉地や観光地と一体となった「観光+エコツーリズム」の体験メニューを整備することが考えられる。観光地との一体的な戦略が取れることとなれば、奥雲仙田代原の特産品についても、それぞれの観光地において、販売・PRも可能となり、販路は飛躍的に向上するものと思われる。しかし、これらの整備に当たっては、各温泉協会との連携が必要となるが、現時点では、なかなか連携が図れるような環境にない状況にあるという。



むしろ、田代原地区は、奥雲仙地区という島原半島の奥まった位置にあるものの、田代原地区へ訪れるためのルート上には、国見（神代小路）等の歴史的な観光地や、岩戸神社、岩戸レストラン、百花亭等の飲食店や商店、および観光地がある。これらの地域との連携を模索することも必要であろう。



4. 取り上げるテーマ

奥雲仙の田代原地区が抱える課題を、次の3つのテーマに絞り検討する。

テーマA：地域再生・活性化（牧畜業など、かつての産業の復活）

【テーマ設定の背景】

- 田代原地区におけるミヤマキリシマ保全活動は、「田代原地区が今後も継続していくためには、現在の環境を維持していくこと必要である」という視点から行われている。
- 現在の環境を維持するためのシンボルが、「牧野環境のミヤマキリシマ」である。
- その環境を維持していた放牧された牛が、現在、減少していくなか、NPOでは、人手をかけて下草刈り等を行っているが、毎年、活発に侵入してくるアカマツからミヤマキリシマを保全する活動には限界があると感じている。
- 牛の減少を人手で補うことに限界があるのであれば、もともとの要因である牛が減ってしまったという問題を解決する方策がないのだろうか。地域再生・活性化のために、牧畜産業などのかつての産業が復活できないものだろうか？

テーマB：森林環境教育の場作り（「遊々の森」の活用方策）

【テーマ設定の背景】

- 昨年3月まで、「遊々の森」では牛の放牧があった。そのため、草地環境が維持されてきたが、それ以降、牛の放牧がなくなり、草地から樹林地への移行が始まっている
- 草地環境を維持するために、①牛の放牧を再開できないか、②この場所が貴重であるということを知らしめる活動が必要と考えられる
- ①については、Aチームが検討することとし、Bチームでは、「遊々の森」の価値（草地と樹林環境が入り混じった環境。一種の「里山」的な環境であると考えている）を、多くの人に知ってもらうための方策を議論する。

テーマC：地域連携と観光ネットワーク形成

【テーマ設定の背景】

- 地元奥雲仙田代原は、これまでミヤマキリシマが咲く牧草地として、また、キャンプ場としての魅力がある場所であった。しかし、牛の頭数が減り、草地から樹林地への移行が始まっている。そのため、この地域の魅力が失われつつある。
- この地域の魅力を高めるためには、この場所の特徴である草地環境を維持することとにあわせて、さらに魅力のある地域づくりをしなければいけない。
- Cチームでは、地域の魅力を上げ、多くの人に来訪してもらう活性化策を議論する。
- 近隣に、雲仙温泉や小浜温泉などの有名な観光地はあるが、それらの温泉地との連携は、現時点では、なかなか困難であるため、独自の活性化策を考えなければいけない。
- 地域の魅力について踏まえたうえで、独自の地域連携策を議論する。

5. Aチームでの検討結果

テーマA：地域再生・活性化（牧畜業など、かつての産業の復活）

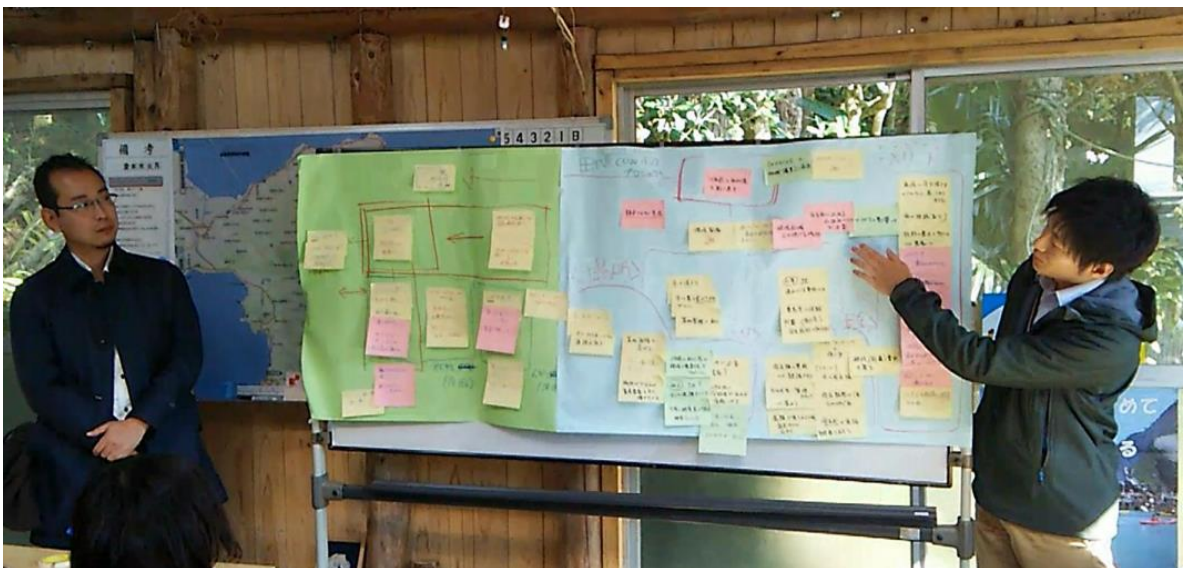
【テーマ設定の背景】

- 田代原地区におけるミヤマキリシマ保全活動は、「田代原地区が今後も継続していくためには、現在の環境を維持していくこと必要である」という視点から行われている。
- 現在の環境を維持するためのシンボルが、「牧野環境のミヤマキリシマ」である。
- その環境を維持していた放牧された牛が、現在、減少していくなか、NPOでは、人手をかけて下草刈り等を行っているが、毎年、活発に侵入してくるアカマツからミヤマキリシマを保全する活動には限界があると感じている。
- 牛の減少を人手で補うことに限界があるのであれば、もともとの要因である牛が減ってしまったという問題を解決する方策がないのだろうか。地域再生・活性化のために、牧畜産業などのかつての産業が復活できないものだろうか？

5-1. チームメンバー

JCCA 若手技術者	
松浦 琢	国際航業 九州支社
岡本 直也	八千代エッジ エリック 九州支店
九州 郷づくり共助ネットワーク研究会	
矢ヶ部 輝明	プロジェクト責任者 (A)
前田 武	

*NPO、地元の方々もチームに参加



5-2. ステージ①問題分析：中心問題の決定

チームメンバーから出た中心問題と思われるものへの意見は次のとおり

中心問題と考えられる事象

- 牛の頭数が減ったこと
- 奥雲仙地域の元気がないこと（過疎化）
- 奥雲仙地域が知られていない（知名度不足）

その他、周辺が植林地（アカマツ林）となっていることで、草原から樹林地への進行速度が速くなっているとの意見（広葉樹を中心とする自然林では、高木の成長速度が遅い）があり、植林地を自然林へ戻すことが必要という意見や、ミヤマキリシマを守ることで地域を守ることが両立するのかという意見もだされた。

これら出された意見を踏まえ、奥雲仙地域の元気を取り戻すことや、知名度を上げる方策への検討は、他チームでも取り上げられるため、A チームでは、「**牛の頭数が減ったこと**」を中心問題とすることとした。

次に、「牛の頭数が減った」という中心問題が起きている原因については、次のような意見・情報が提供された。

中心問題が起きている原因

- 放牧には林野庁へ支払う負担金（5,000 円/年・頭）があること
- 近隣の牧場では、雲仙市の補助金がでて設備投資が行われている
- 牛の餌が、牧草地の草から、購入飼料へ変わっていている。
- 人的な管理不足（後継者不足、農家戸数の減少等）
- 放牧・農業と環境保全のシステムの弱体化 等

このうち、最近の頭数の減少は、**林野庁の負担金の影響が大きい**ものと思われるとの情報が提供された。また、奥雲仙（田代原）での放牧については、放牧というスタイルは牛へのストレスを少なくすること、近隣の牧場はすでに満杯状態になりつつあること等の奥雲仙（田代原）で放牧するメリットもあることが報告された。

5-3. ステージ②問題分析：目的分析

チームメンバーから出た中心目的と思われるものへの意見は次のとおり

中心目的と考えられること

- 15年前の奥雲仙（田代原）を取り戻す。（現在、20頭に減少した牛の頭数を50頭程度にする）
- ミヤマキリシマと地域とが共生する環境づくりを行う

この中心目的を達成するために、次のようにプロジェクトを命名し具体策を検討することとした。

プロジェクト名：**田代原 COW バック プロジェクト**

中心目的を解決する手段については、次のような意見がだされた。

- 奥雲仙（田代原）を「環境牧場」と位置付け、ミヤマキリシマとその生育環境である草地環境を保全するための放牧を行う牧場とする。牧場の目的は、草地管理であり、牛は、草を食べてもらうためだけに放牧する。そのため、比較的 management が容易である。
- 「環境牧場」とすることで話題性が生まれ、牛車に乗れるようにすることで、観光的な魅力もでることによって人を呼べる場所になる。
- 牛の減少を引き起こしている農家の負担金をカバーするため、例えば、クラウドファンドの仕組みを活用し、牛の命名権を与えることをリターンとした公募を行う。命名権料は、5,000 円/頭・年。
- 老齢の牛や馬（恐らく1頭、10万円〜20万円）を、クラウドファンドの仕組みを活用し購入し、放牧する。
- 羊、ヤギ等の草を食べる動物を連れてくる（運搬費の負担のみで購入費がかからないものがある）
- 放牧数を増やすための環境づくり（「悠々の森」と一体的な牧場とする等、草地環境を拡大する）を行うことが必要になる。
- 牧畜農家は、放牧数を増やすことができるのであれば、増やしたい農家もあるものと思われる。

なお、これらのプロジェクトを進めていくためには、雲仙市も取り込んだ仕組みづくりが必要となる。

5-4. A チームが提案するプロジェクトの概要

プロジェクト名	田代原 COW バック プロジェクト
目的・概要	奥雲仙（田代原）を「環境牧場」と位置付け、ミヤマキリシマとその生育環境である草地環境を保全するための放牧を行う牧場とする。牧場の目的は、草地管理であり、牛は、草を食べてもらうためだけに放牧する。そのため、比較的管理が容易である。「環境牧場」とすることで話題性が生まれ、牛車に乗れるようにすることで、観光的な魅力もでることによって人を呼べる場所になる。
プロジェクトの内容	老齢の牛や馬（恐らく1頭、10万円〜20万円）を購入すること、および、負担金の問題で近隣の牧場に移動した牛が戻ってくることで、奥雲仙（田代原）の放牧数を50頭に復元する。運搬費の負担のみで購入費がかからない羊、ヤギ等の草を食べる動物を連れてくることも検討する。
環境づくり	「遊々の森」と一体的な牧場とする等、草地面積を拡大する
資金計画 等	クラウドファンドの仕組みを活用する。 <ul style="list-style-type: none"> • 牛の命名権を与えることをリターンとした公募を行う。命名権料は、負担金の問題を解決する場合は、5,000円/頭・年。なお、老齢の牛・馬の購入資金については、今後検討する。 • 「命名式」等のイベントを行うことで、牛のオーナーと命名権を購入した市民、および、地域人との交流を促進する。 • 命名した牛を遠隔地からでも見れる仕組み（定点カメラ、GPS）
PR	一般市民へのPR <ul style="list-style-type: none"> • ミヤマキリシマ保全等奥雲仙牧地域の環境保全の必要性 畜農家へのPR <ul style="list-style-type: none"> • 負担金分を「環境牧場」で負担すること。 • 奥雲仙（田代原）での放牧のメリット。
実施体制	NPOの内部に、分科会をつくる。分科会メンバーについては公募する。 牧畜、環境、クラウドファンドの各専門家の協力を仰ぐ JA、大学関係、雲仙市を取り込んだ仕組みづくり

6. Bチームの検討結果

テーマB：森林環境教育の場作り（「遊々の森」の活用方策）

【テーマ設定の背景】

- 昨年3月まで、「遊々の森」では牛の放牧があった。そのため、草地環境が維持されてきたが、それ以降、牛の放牧がなくなり、草地から樹林地への移行が始まっている
- 草地環境を維持するために、①牛の放牧を再開できないか、②この場所が貴重であるということを知らしめる活動が必要と考えられる
- ①については、Aチームが検討することとし、Bチームでは、「遊々の森」の価値（草地と樹林環境が入り混じった環境。一種の「里山」的な環境であると考えている）を、多くの人に知ってもらうための方策を議論する。

6-1. チームメンバー

JCCA 若手技術者	
竹 翔太郎	第一復建
九州 郷づくり共助ネットワーク研究会	
山下 建郎	プロジェクト副責任者（B）
木寺 佐和記	
波多野 健志	

*NPO、地元の方々もチームに参加



6-2. ステージ① 問題分析：中心問題の決定

チームメンバーから出た「様々な問題点」の代表的なものは、以下のとおりである。また、参考までに、現在の状況等に関する発言内容も記す（青字）。

様々な問題点等（青字は、現況等に関するもの）

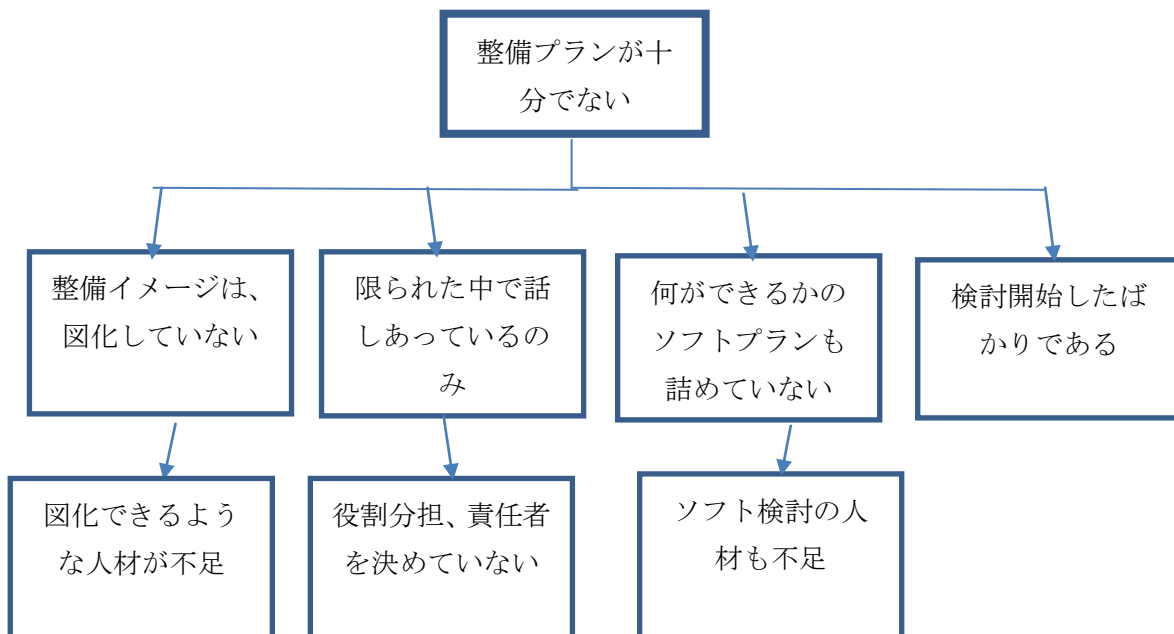
- ・整備プラン全体像もきちんとしたものはない（大凡のイメージはあるが）。
- ・遊々の森（奥雲仙牧場の森）でどのような環境教育ができるかも明確化できていない（春のメニューや秋のメニュー等）。
- ・整備は開始したばかりである。
- ・遊々の森に関する情報発信が不足している。 ・外との交流が少ない。
- ・地元の人にも知られていない。 ・地元の人に関心が低い。
- ・案内板、看板もない。 ・30～40才台の人（子供の親の世代）に知られていない。
- ・駐車スペースが不足している。 ・地元の人が分かるような活動が不足。
- ・遠足がこなくなった。 ・子供だけでは来られない（引率者が必要）。
- ・夏場前後はダニがおり、子供達が入れるのは秋～春に限定される。
- ・まだ安心して人を呼べない。 ・子供会、学童保育等との接触が少ない。
- ・現段階では、未だ、アピールできるような点が不足している。
- ・子供達に活用して欲しいと思っているが、どんな団体があるのか整理が不十分。
- ・今の大人は安心して山の中へ入る方法を知らない。
- ・樹木プレートを付けたいが、樹木に詳しい人がいない。 ・巣箱は付けたが、鳥の観察ができる人がいない。 ・山遊びのリーダー、指導員は不足している。
- ・植物等の専門家が、守る会のメンバーにはいない。 ・プラン等の全体をまとめる力も弱い。 ・作業できる人材が限られている。 ・教材価値等の良さのPR不足。
- ・常時、管理（見守り）できるような体制にはなっていない。
- ・観察のエリア、体験のエリア等の区分ができていない。
- ・森の道路沿いの緩い斜面部（タブの木付近）にはダニはいない。
- ・道路沿いのタブの木付近にターザンロープを計画している。 ・大人になってから戻ってこられる場所である。
- ・全体を周回できるような散策路（ごく自然なイメージの）を計画している。
- ・駐車スペースは、現在の入口部分を均すことで可能と考えている。
- ・上田代と下田代間を牛が行き来するトンネルがあるが、現在は閉じている。
- ・遊々の森（下田代）にも、少なくなってきたがミヤマキリシマも生息している。
- ・ヤマボウシの木もある。 ・奥には平坦なスペースもある。
- ・樹齢300年と言われるモミジの木もある。 ・起伏が適当にあり楽しく遊べる。

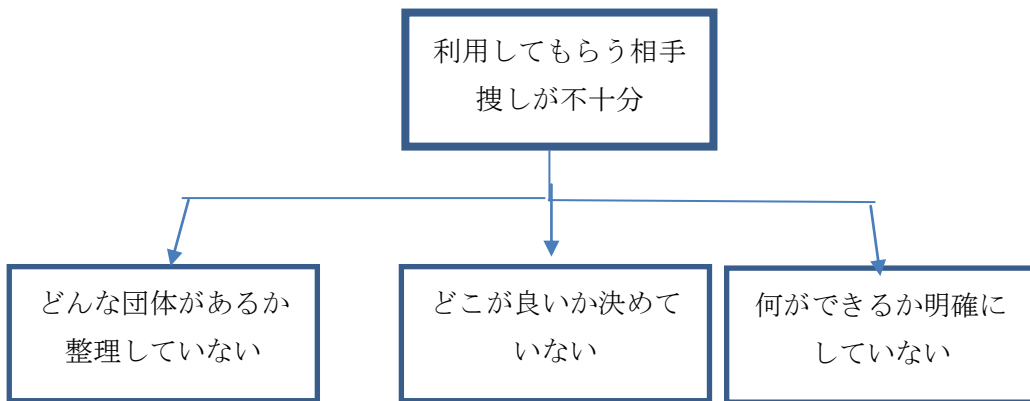
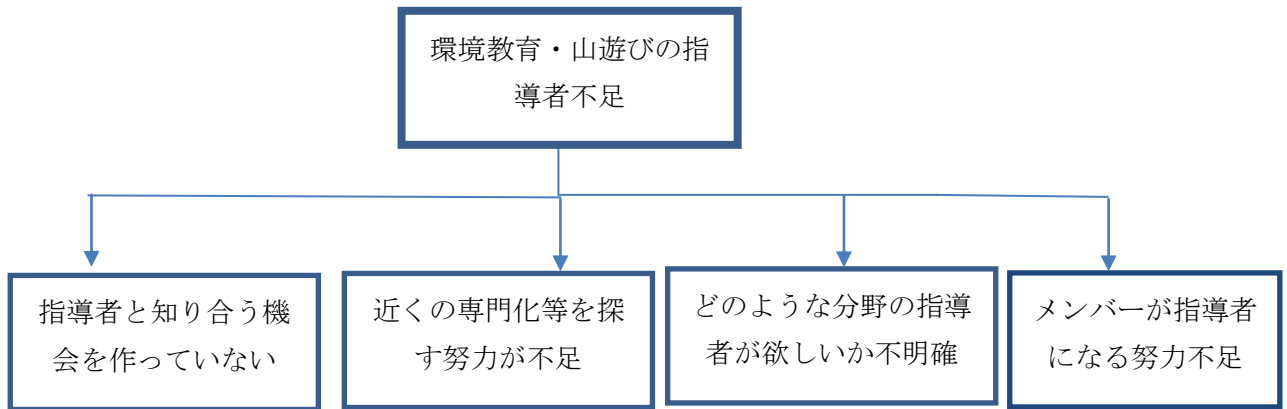
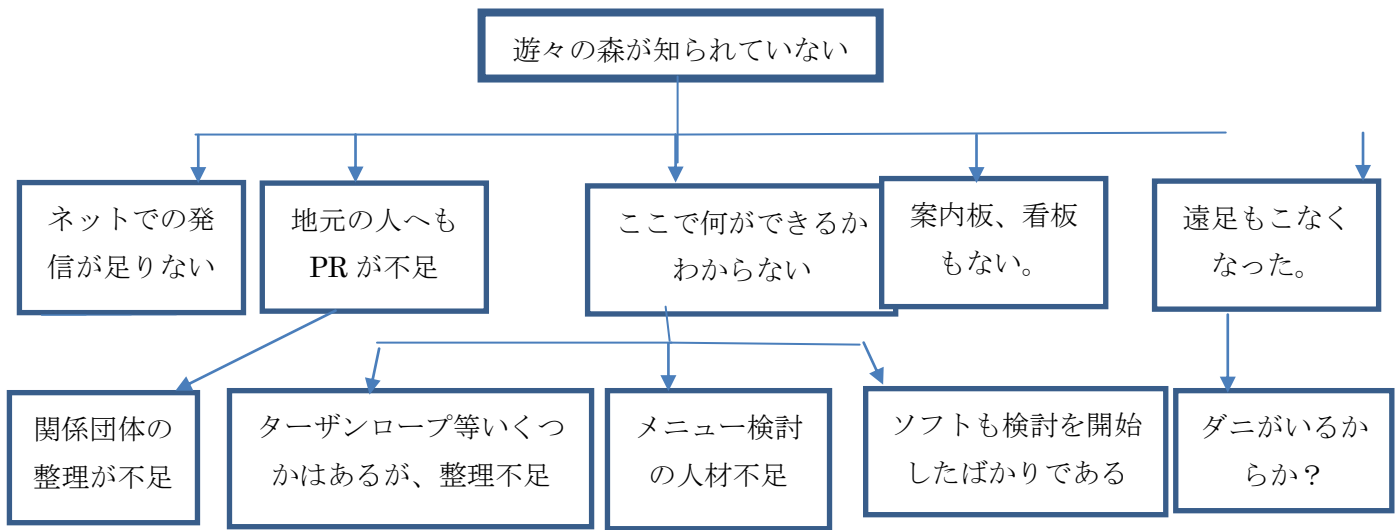
以上の様々な問題点、また現在進行中の整備に関する事実等に基づいて、中心問題と考えられた点は、以下の4点である。

中心問題と考えられたこと

- ① 整備（ハード）プランが十分でない。
- ② 「遊々の森」が知られていない。
- ③ アクティビティを指導できる人材の不足。
- ④ 遊々も森へと呼び込もうとする相手に関する方針が未確立。

これらの中心問題の原因として考えられたことは、ほぼ、以下のとおりである。





6-3. ステージ②目的分析

中心問題のそれぞれについて、何をすれば良いか、どうすれば良いかを話し合った。その結果は、以下のとおりである。

● 整備プランを明確にする

↓（そのためには）

- ① イメージはあるので、それを明確にする。
- ② そのためには、担当者を中田代表に決めてもらい、その担当者できちんと話し合う。
- ③ その結果を他の人にも分かるようにする。
- ④ そのためには、簡単でも良いので図面化する。
- ⑤ 図面化の作業が難しい場合は、共助研メンバー等に相談する。
- ⑥ 整備プランは、ソフトメニューとの関係付けに留意する。
- ⑦ 駐車スペースの確保、域内全体の周回路（散策路、ただし自然保全型のもの）、ターザンロープ、ブランコエリア、順路、中心部整備等は既に決めているものを明確化する。
- ⑧ 全体の草刈は未だ必要でかつどこでも行けるようにする。
- ⑨ 子供が走り回れるエリアも欲しい。
- ⑩ ミヤマキリシマ、ヤマボウシの保全も考えられる。
- ⑪ ダニ、ヘビ、寒さ等の問題もあるため、活用時期は春と秋がメインとなる。
- ⑫ 国立公園内の規則の制約の下で可能なことを行う。
- ⑬ 整備作業の人材は、奥雲仙の自然を守る会メンバーが中心とならざるを得ないが、可能な限り、公的組織、他の団体等に呼び掛ける。
- ⑭ 人材、資金面を睨み、まずは、第一段階として、最小必要限の整備プランとする。

● とにかく遊々の森を多くの人に知ってもらう

↓（そのためには）

- ① まずは、そこがどんなところで、何ができるかを明確にする。
- ② 何ができるかのソフトメニューについてもこれまで色々な案は出ているので、まずはそれを整理する。
- ③ 当然、ハード整備プランと遣り取りをしながら検討・整理する。
- ④ 新しいメニューを考える場合は、たくさんの事例等がネットや本にあるので参考とする。
- ⑤ 本としては、例えば、（一社）全国森林レクリエーション協会の以下のような本が参考となる。
 - ・森林環境教育の手引き
 - ・なつかしの野外活動アクティビティ集
 - ・森あそび・野遊び
 - ・身近な里山のアクティビティ集
 - ・森の幼稚園アクティビティ集
 - ・森林環境教育アクティビティ・プログラム集
 - ・続森林環境教育アクティビティ集
- ⑥ また、「プレーパーク」という概念・場が好評で、これについても調べてみる。
- ⑦ メンバーや地元の人には覚えている「昔遊び」を、メニューとして用意すれば特色が出る。
- ⑧ このように何ができるか、どんなところかを明確にした上で、利用してもらえそうな団体を捜し、働き掛ける（利用団体検討については別途検討参照）。
- ⑨ また、何ができるか、どんなところかを明確にすれば、ネット配信もやりやすい。

- ⑩ 当然、案内板、看板の設置も行う。
- ⑪ なお、遊々の森単独の情報発信よりも、田代原（奥雲仙）全体として発信して行くほうが、発信力は強くなる。従って、他チームの実行策との連携も当然必要。

- 専門家を捜し、協力してもらう

↓（そのためには）

- ① どのような専門家をイメージしているか整理する。
- ② 考えられる専門家としては、植物、鳥類、昆虫、地質、歴史等々である。
- ③ このような方と知り合う切っ掛けとなる「各種イベント・勉強会等」に積極的に出る。
- ④ そして、知り合いになる。
- ⑤ 最も身近な方として、岸田自然保護官に相談することが良い。
- ⑥ なお、昔遊び等であれば、現在のメンバーや地元の方で専門家に近いことができるはず。

- 利用してもらえそうな相手を明確にし、打診する。

↓（そのためには）

- ① 子供たちに関する近辺の団体等を整理する。
- ② 例えば、小学校、子供クラブ等々（岩戸小、矢斗木小、みどりの少年団、くにみ幼稚園、自治会の子供会、長崎大学、学童保育、瑞宝太鼓等々）。
- ③ そして、ハード、ソフトの準備状況、季節を考慮しながら、打診の行動を起こす。

6-4. ステージ③ プロジェクトの決定

Bチームが提案するプロジェクトは、以下のとおりとする。

プロジェクト名	遊々の森・創生プロジェクト（4本の矢でその実現を行う）	
4本の矢 （4本のサブ・プロジェクト）	① 第1の矢：整備プランの明確化 ② 第2の矢：知ってもらえるような様々な取り組みを行う ③ 第3の矢：協力してもらおう専門家を見つける ④ 第4の矢：利用してもらおう相手を見つける （4本の矢は同時進行が望ましいが、まずは、第1と第2の矢を放つ）	
サブ・プロジェクトのための 実行策（行動計画）	① 整備プランの 明確化	・イメージはあるので、それを明確にする等、詳細行動としては、目的分析結果の記載事項等を実行する。
	② 知ってもらえる ような様々な 取り組みを行 う	・ハード整備と連携しながら、ソフトメニューを徐々に準備していく。まずは、これまでのアイデアを整理していく（ターザンロープ、散策路、樹木プレート設置）。その他の詳細行動は、目的分析結果参照。ソフトメニューの第一段階ができた後には、情報発信（利用可能な団体へのPR、ネット活用）を積極的に行う。
	③ 専門家探し	・どんな専門家が必要か、ソフトメニューを考慮しながら明確にし、まずは岸田保護官他に相談する。また、積極的にイベント等に出席して協力して頂けそうな専門家を見つける。詳細行動は目的分析結果参照。
	④ 利用者探し	・まずは、子供達に関する地元団体（小学校他）を洗い出して、ハード、ソフトを提示しながら打診する。 （なお、このプロジェクト達成の成否の指標として、年間、何人程度を決めておいたほうが望ましい。）
実現のための体制等	① まずは、「奥雲仙の自然を守る会」のメンバーで、上記4つの矢（プロジェクト）の役割分担を行う。 ② 必要に応じて、岸田保護官、地元行政、共助研等の支援を検討する。 ③ 資金計画、作業者の動員計画を行い、実現可能な体制を整備する。 ④ また、大まかで良いのでスケジュール表作成も望ましい。	
外部条件	① 国立公園内であること等、各種の法規関係の条件を整理・把握が必要。	
前提条件	① 遊々の森は、放牧場としては当面使用しない。	
その他（行動達成のための 指標の設定）	① 4本の矢毎に、それぞれの行動達成の成否を評価する指標を定めておいた方が良い。	

7. Cチームの検討結果

テーマC：地域連携と観光ネットワーク形成

【テーマ設定の背景】

- 地元奥雲仙田代原は、これまでミヤマキリシマが咲く牧草地として、また、キャンプ場としての魅力がある場所であった。しかし、牛の頭数が減り、草地から樹林地への移行が始まっている。そのため、この地域の魅力が失われつつある。
- この地域の魅力を高めるためには、この場所の特徴である草地環境を維持することとあわせて、さらに魅力のある地域づくりをしなければいけない。
- Cチームでは、地域の魅力を上げ、多くの人に来訪してもらう活性化策を議論する。
- 近隣に、雲仙温泉や小浜温泉などの有名な観光地はあるが、それらの温泉地との連携は、現時点では、なかなか困難であるため、独自の活性化策を考えなければいけない。
- 地域の魅力について踏まえたうえで、独自の地域連携策を議論する。

7-1. メンバー

若手技術者	
濱崎 瑛貴	福山ｺﾝｻﾙﾀﾝﾄ
九州 郷づくり共助ネットワーク研究会	
松尾 敏彦	プロジェクト副責任者 (C)
波木 健一	総括責任者
金尾 俊郎	地域支援アドバイス (2日目のみ)

*NPO、地元の方々もチームに参加

Cチームでは、田代原地区活性化の視点として、周辺地域との連携、特に観光ネットワーク形成としての連携をどのように組み立てるべきかが議論された。

議論の手順として、まず地域連携の観点からの現状・問題・課題について話し合い、そこから中心問題を抽出し、さらにプロジェクトを検討するというステップで進めた。



7-2. ステージ①問題分析：地域連携に関する問題から中心問題へ

地域の主な課題

- ①当該地域までは目的地が分かりづらい上に時間がかかる
- ②資源はたくさんあるが、外部にあまり知られていない、伝わっていない
- ③地域産の農産物が地域で活かされていない
- ④地域を引っ張っていくリーダー的な存在がない
- ⑤行政間の一体的な連携がない
- ⑥田代原の資源に付加価値がついていない

●中心問題

田代原（奥雲仙地域）のことが、ほとんど知られていない！

田代原（奥雲仙地域）においては、「奥雲仙の自然を守る会」による自然保護活動・自然環境教育活動等が長年にわたり取り組まれているにもかかわらず、その活動意義や観光面からの位置づけ等がほとんど認識されていない、という問題がある。

これを中心問題として、田代原という地理的特性を生かしながら、「奥雲仙の自然を守る会」を核とする人的、物的、情動的ネットワークをつくり、その存在を広く伝えていくことが、中心課題である。



協議風景

7-3. ステージ②問題分析：原因分析

この中心問題の原因となっている要因は、地域の主な課題と関連付けて以下のように分析される。

●地理的なマイナス要因（目的地の分かりにくさ・時間がかかる）

島原半島は、観光資源が多くそれが半島内に広く分布しているが、半島全体を見て回るには移動時間がかかるため、半島全体を回ろうとする人は少ない。

観光拠点である雲仙岳や島原等へのアクセス経路は東西方向の国道利用が多く、田代原はそのルートから少し外れており、目的地としてわかりにくい

また、観光で回るとしても標示板が少なく、田代原においても道路標示が見受けられない。

●資源は多いが、知られていない、伝わっていない。

島原半島には、火山、自然、温泉など多様な資源があり、古くからの歴史もある。さらに特徴的な農産物も多くあり、半島北部（地元では「北目（きため）」と呼ぶ）も観光の町として少しずつ知名度があがっているようである。

しかしながら、火山観光地として類似した阿蘇山等と比べて宣伝がいきわたっておらず、地域の資源が活用されていない。

地域には、知られていない町の名所や眠っている人的資源がまだ多くあるのだが、知られておらず、また古い雲仙のことなど地域の歴史が地元でも伝わっていないため、外に向けた発信がなされていない。

●地元産の農産物が地域で活かされていない

地域には豊富な農産物があるが、農産物のブランド化により良いものは都市部に流通されて、地元に残るのは2級・3級品ばかりで地産地消が難しくなっている。

このため、地元で農産物加工をしたくとも、地元の素材が手に入りにくい。また良い素材を持っている人がいても、大きなイベント等がなく、出すチャンスがない。

しかし、なかには地元農家と直接取引して、100%地元素材を使った加工品を売り出しているケースもある。（旅館松栄の例等）販売ルートを持つ地域内加工者と農家との連携が重要である。

●地域を引っ張っていくリーダーがない

島原半島には核となるリーダーがおらず、人を頼る傾向が強い。

観光資源は多く、観光協会により地域紹介資料は作ってあるのだが、作れば終わり、その資料も入場者だけにしか配布していない。昨今の観光行動が、団体行動から個人の活動へとシフトしているのに対応できていない。

田代原でも、会を運営する人材が不足しており、地域と連携するノウハウがわからない状況が続いている。

●行政間の一体的な連携がない

島原半島内3市の行政間の連携が少ない。合併後、民間のリスクを行政が負わなくなった。

また、情報発信が少ない。市の記念事業等があるが、市民に連絡が来ておらず、今では行政主体でやっている。

半島内では、住む場所と生産・保全する場所が離れているのも原因か。

●田代原にマイナスイメージ／資源の付加価値化がされていない

田代原は、長崎牛の育成牧場として半島地域の牧畜が最初に始まった場所で、昔は学校遠足の目的地でもあった。しかし、その頃の思い出としては、牛のフンや臭いが気になる場所としてしか記憶に残らなかった。

雲仙観光は概して「見る」だけの観光となっており、「殿様商売」をしているため付加価値が少ない。例えば、そうめんは各組合が個別に販売しており、全国有数の産地としての付加価値を付けた特色づくりができず、ブランド化が進んでいない。

田代原のヤマボウシもきれいだが、見たら何かあるのか。それからの価値が見えない。もう一つの何かが必要である。

田代原に喫茶店・売場等があれば立ち寄る価値も増すのだが、国立公園内なのでできない。

7-4. ステージ③問題分析：目的分析

原因分析の議論を通して出た、中心目的と思われるものへの意見は次のとおり

●中心目的と考えられること

- ・田代原を盛り上げて注目してもらう
- ・地元の者が奥雲仙を大事にする！ ⇒北目と田代原（奥雲仙）の関係づくりから

田代原の知名度を上げるために、まずは、田代原を囲む周辺地域の人々に認知してもらい、協働で地域おこしを進めさらに雇用をつくっていくことが重要である。

半島観光の核は雲仙岳。しかし、雲仙岳に行く主なアクセスルートは、半島西部の小浜から、または半島東部の島原からの国道が主体。これらの東西ルート沿いの地域では、すでに先行して地域おこしが進められており、後発の田代原との協働にどこまで関心をもってもらえるか？

今、田代原が周辺地域と協働を進めるとしたら、いまだアクセスルートとしての認知があまり進んでいない半島北部（北目）との関係づくりから始めるべきではないか。田代原でできないこと（販売、宿泊等）を北目のマチ側と連携することから、検討すべきである。

この関係づくりが進み、諫早湾側からの南北観光ルート（北目ルート）が整備されれば、小浜・千々石からの西目ルートや島原からの東目ルートとの関連性も強くなり、「島原半島はひとつ」という半島全体の一体感の高まりと合わせて、各ルートの交差箇所に位置する田代原の知名度も飛躍的に高まると考えられる。

このような考え方から、この中心目的を達成するために、次のようにプロジェクトを命名し具体策を検討することとした。

プロジェクト名：^{きため}雲仙北目ロード プロジェクト

- ① まずは「奥雲仙田代原地域」に魅力を持たせる。
- ② 魅力を備えた「奥雲仙田代原地域」に来訪してもらうために、ウォーキングイベント等のイベントを開催する。
- ③ そのイベント開催に向けて、田代原への北側からのアクセスルートである県道131号線（雲仙北目ロードと命名）を軸として、その沿線の商業施設や地域特産品を使った商品開発等を展開し、地域一体として活動する。

7-5. Cチームが提案するプロジェクトの概要

プロジェクト名	<p style="text-align: center;"><small>きため</small> 雲仙北目ロード プロジェクト</p>
目的・概要	<p>奥雲仙（田代原）の知名度を上げるためには、田代原を囲む周辺地域の人々に認知してもらい、協働で地域おこしを進めていくことが重要である。</p> <p>そのために先ず、貴重な地域資源を持ちつつもまだあまり知られていない半島北部（北目）地域と田代原との連携を進めていく。</p> <p>北部の神代地区から雲仙温泉に連絡する県道雲仙神代線は、諫早湾の大パノラマを眺望しつつ高低差 600m を一気に上り下りする北目の幹線道路である。この道路沿いの人、自然、特産品等が相互に連携して、北目地域一帯の新たな付加価値を創生していく活動を、「雲仙北目ロード プロジェクト」として実施する。</p>
プロジェクトの内容	<p>●田代原イメージアップ プロジェクト</p> <p>放牧地としての田代原の機能強化、遊々の森の魅力化とあわせて、癒しの場としての田代原のイメージアップを図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・面白い尼さんのいるパワースポット ・デトックス・プレース（解毒による健康法の体験場） <p>●北目坂ウォーキング プロジェクト</p> <p>神代から田代原までの一本勾配の県道（北目坂）をルートとするウォーキング大会を開催する。開催時期は、田代原でのミヤマキリシマ開花時期・ヤマボウシ開花時期や紅葉時期、神代での特産市開催時等にあわせることとし、上りコース、下りコース等を検討する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・森林ウォーキング（岩戸神社⇒田代原の上りコース） ・絶景ウォーキング（田代原⇒神代の下りコース） <p>●北目繋がり プロジェクト</p> <p>ウォーキング大会の開催運営を担う体制づくりとして、北目ロード沿いの商業者、農家、住民等が互いの地域資源を活用しながら連携する活動を進める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・奥雲仙ユズを使った商品開発・販売ルート開発。 ・北目ロード沿線での共通ポイント・共通シール活動。 ⇒田代原での環境保護活動で得たポイントを使って、カフェ利用や特産品ゲット。 ・神代地区での地域産品マーケット開催。（地産地消活動） ・岩戸神社～田代原等のパワースポット巡り。

実現のための体制等	<ul style="list-style-type: none"> ・奥雲仙の自然を守る会を連絡事務局として、県道（雲仙北目ロード）沿いの商業者、農業者、住民等との関係づくり（声掛け）から始める。 ・共同できる活動から企画提案し、実施する。（各店頭でのチラシ配布、特産品配置、知恵だし会議の開催など） ・一定の賛同が得られた段階で、共同イベント（特産品市、地域イベント等での共同宣伝等）を企画提案し、実施する。 ・共同イベント等の経験を通して、ウォーキング大会等の開催に向けた実行委員会を結成し、その実行に向けて進める。
外部条件（資金計画）	<ul style="list-style-type: none"> ・当面は、関係者各自の手弁当で進める。 ・雲仙市等による地域づくり支援金等の活用も検討する。
前提条件	県道沿い住民や一般市民へのPR <ul style="list-style-type: none"> ・田代原の歴史や放牧による環境保全の意義 ・田代原のジオパークとしての位置づけ
実施体制	当面は、奥雲仙の自然を守る会と外部団体（共助研等）が連携して活動する。 イベント開催等において、長崎大学との連携も。

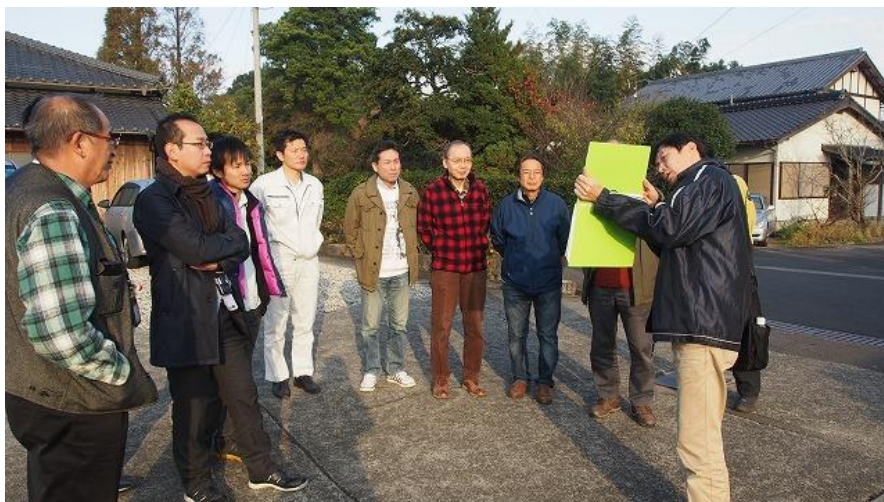


図 「雲仙北目ロード（北目坂）」の概念図

8. PHOTO アルバム



宿泊した国見「旅館 松栄」でおかみさんと一緒に記念撮影



神代小路での現地見学にて



説明いただいた古賀さん



初日の作業風景



中田代表の話に聞き入る
長崎大学学生さん



「悠々の森」での草刈り風景

9. 参加者アンケート回答

若手技術者向け・フィールド参加型「地域課題発見・解決力」養成研修会 若手技術者 参加アンケート

平成 26 年 11 月 14 日からの 2 日間の研修、お疲れさまでした。
今回の研修の成果を、今後の活動につなげるためにアンケート作成にご協力ください。
なお、アンケート作成にあたっては、研修中に使用した資料等を参考にお答えください。

回答者 : 松浦 琢 (氏名をご記入ください)

チーム名 : A チーム B チーム、C チーム (参加チーム名を囲んでください)

質問 1 : 検討の対象となった「奥雲仙田代原」について、チームで扱ったテーマ上の課題についてわかったことをご記入ください (箇条書き)

- ① 地域の産業である放牧牛の減少
- ② アカマツの遷移による草地面積の減少や下草の繁茂に起因するミヤマキリシマの減少
- ③ 放牧とミヤマキリシマが両立していた時代・環境についての情報発信不足
- ④ ミヤマキリシマの保全管理に関わる人材・資金不足

質問 2 : 質問 1 の課題の中で、地元の方との話し合いの中でわかった課題、地元の方の意見がなければ浮かび上がらなかった課題はありましたか。その課題と、地元の方の視点について気づいたことをご記入ください。(質問 1 の該当する課題番号を記載し、その欄に記載ください)

- ① 地域の産業である放牧牛の減少
放牧牛の減少には以下のような理由があることが分かった。
 - 1) 購入飼料のほうが飼育効率が良い
 - 2) 目が届かないため畜舎に比べて管理が難しい
 - 3) 農家戸数の減少による人材不足
 - 4) 畜舎での飼育には補助金がある、等
- ② アカマツの遷移や下草の繁茂に起因するミヤマキリシマの減少
アカマツの遷移は照葉樹等に比べて早く、草地面積の維持のために伐採するにも人手が掛かり半ば放置せざるを得ない状況である。また、放牧牛の減少により下草の繁茂が進むことでミヤマキリシマが減少した。
- ③ 放牧とミヤマキリシマが両立していた時代・環境についての情報発信不足
放牧とミヤマキリシマの両立が田代原の価値を創造していたこと及び情報を発信し価値を共有できる人を増やすことが環境の維持に繋がることについての気づきの遅れとツール(手法)が不足している。
- ④ ミヤマキリシマの保全・管理に関わる人手不足
放牧の問題と同じく、地域の高齢化や後継者がいないことによって保全・管理に関わる人材が不足している。

質問3：地域課題を発見するために、大切なこと、必要なことをご記入ください（箇条書き）。

- ・地元の意見から現状を汲み取り、第三者の視点を交えて課題を共有すること
- ・対象の課題のみならず、その周辺の事象を併せてよく観察すること

質問4：質問1で記入いただいた課題の解決方策について、今回の研修期間のなかで考えた対応方法を記入ください。（質問1の番号と対応して、課題の番号の欄に記入ください）

(番号) ①②③・・・・・・・・・・・・・・・・・・記入欄・・・・・・・・・・・・・・・・・・

- ① クラウドファンディングを利用して放牧牛の命名権制度を運用し、資金的な放牧のデメリットを解消する。
- ② 放牧牛を増加させることによって下草の繁茂を抑制する。
- ③ クラウドファンディングの利用によって田代原の価値を再確認し、発信する。
- ④ NPO 内に分科会を設置し、様々な問題に対して必要に応じた体制をとれるようにする。

質問5：課題解決策を見つけるために、大切だと思われることをご記入ください。（箇条書き）

- ・類似の事例や外部からの様々な視点を取り入れ、地域の課題に適した策を共有すること
- ・課題を短期、中期、長期に振り分け、優先すべきことや必要な人員等を適切に整理すること
- ・解決策の具体化にあたって様々な立場からの意見を考慮すること

質問6：今回の研修会を通して感想をお聞かせください。（該当する番号を丸で囲んでください）

質問 6-1：今回の研修は、コンサルタント技術を向上するという観点で役に立ちましたか？

- ①たいへん役に立った ②役に立った ③あまり役に立たなかった ④その他
その他等意見（ ）

質問 6-2：あなたの周りの技術者の方に、来年度の参加を勧めますか？

- ①積極的に参加を勧める ②勧める ③あまり勧めない ④その他
勧めない理由その他等意見（ ）

質問 6-3：今回の研修は、1泊2日で行いましたが、時間配分はいかがでしたか？

- ①もっと長いほうが良い ②ちょうどいい ③長すぎる ④その他
その他等意見（ ）

質問 6-4：その他今回の研修に関する全般的な意見等

（

）

ご協力ありがとうございました。

若手技術者向け・フィールド参加型「地域課題発見・解決力」養成研修会
若手技術者 参加アンケート

平成 26 年 11 月 14 日からの 2 日間の研修、お疲れさまでした。
今回の研修の成果を、今後の活動につなげるためにアンケート作成にご協力ください。
なお、アンケート作成にあたっては、研修中に使用した資料等を参考にお答えください。

回答者 : 岡本 直也 (氏名をご記入ください)

チーム名 (A チーム、B チーム、C チーム (参加チーム名を囲んでください))

質問 1 : 検討の対象となった「奥雲仙田代原」について、チームで扱ったテーマ上の課題についてわかったことをご記入ください (箇条書き)

- ①放牧される牛が減少し、草地の手入れがなされなくなったことで赤松等の浸食がすすんだ。
- ②赤松等の浸食により草地面積が減少し、ミヤマキリシマの生育環境が悪化した。
- ③牛の減少 (放牧地の変更) には、市の施策や補助金の問題が関係している。
- ④人力による草地の維持・管理には限界がある。
- ⑤重機による草地の整備が効率的だが、現存するミヤマキリシマが犠牲になる。
- ⑥地域再生プロジェクトを立ち上げて、その実施者 (人材) と資金が十分でない。
- ⑦

質問 2 : 質問 1 の課題の中で、地元の方との話し合いの中でわかった課題、地元の方の意見がなければ浮かび上がらなかった課題はありましたか。その課題と、地元の方の視点について気づいたことをご記入ください。(質問 1 の該当する課題番号を記載し、その欄に記載ください)

(番号) ③

記入欄 上田代原の方が放牧環境としては優れている点もあるが、他の地域では一頭あたり 5000 円の補助金が出るなど、資金援助の面で不利となり放牧数の減少に繋がっていた。

質問 3 : 地域課題を発見するために、大切なこと、必要なことをご記入ください (箇条書き)。

- ・地域の現在の様子 (風習・日常・生業など) を地元の方から教えてもらう。
- ・地域の過去の様子を地元の方から教えてもらい、その地域の歴史を知る。
- ・過去と現在を比較し、どんな変化があったか、その要因は何かを探る。
- ・外の視点から、その地域のことを見て、素人目線から気づいたことを指摘する。
- ・専門家を外部から招き、地域の課題の洗い出しをお願いする。

質問4：質問1で記入いただいた課題の解決策について、今回の研修期間のなかで考えた対応方法を記入ください。（質問1の番号と対応して、課題の番号の欄に記入ください）

（番号） ①②③・・・・・・・・・・・・・・・・・・記入欄・・・・・・・・・・・・・・・・・・

- ① 牛の数を増やすことで、かつての草地が管理されていた状況を取り戻す。
→牛の数の適正数の確保。遊々の森の活用。
- ② 草地範囲の拡大ではなく、維持を目的とした放牧の管理体制（環境牧場）を確立する。
→クラウドファンディング（牛の命名権の買い取り）の活用。
- ③ 市への働きかけ（市職員の巻き込み）や資金援助によって、牛の数の増加につなげる。
- ④ かつてのような、放牧による草地の維持管理体制を取り戻す。
- ⑤ 地域かミヤマキリシマか…のゼロサム議論ではなく、その両立を目指す環境牧場を目指す。
- ⑥ 地域再生の取組の情報を広く発信し、地域の知名度とブランドの向上を目指す。
→取組に賛同してくれる人、協力者のネットワークを広く構築し、人の輪を広げる。

質問5：課題解決策を見つけるために、大切だと思われることをご記入ください。（箇条書き）

- ・まずは理想とする状態・状況を思い描き、そのために足りない点を探す。
- ・問題の要因を洗い出し、それぞれに対応する解決案を探る。
- ・外からの視点も追加し、客観的な意見も取り入れる。
- ・現代の最新の手法を用いて、今までにない解決案を探る。
- ・他地域での事例を参考にする。

質問6：今回の研修会を通して感想をお聞かせください。（該当する番号を丸で囲んでください）

質問 6-1：今回の研修は、コンサルタント技術を向上するという観点で役に立ちましたか？

- ①たいへん役に立った ②役に立った ③あまり役に立たなかった ④その他
その他等意見（ ）

質問 6-2：あなたの周りの技術者の方に、来年度の参加を勧めますか？

- ①積極的に参加を勧める ②勧める ③あまり勧めない ④その他
勧めない理由その他等意見（ ）

質問 6-3：今回の研修は、1泊2日で行いましたが、時間配分はいかがでしたか？

- ①もっと長いほうがいい ②ちょうどいい ③長すぎる ④その他
その他等意見（ ）

質問 6-4：その他今回の研修に関する全般的な意見等

（地元の方を交えて“現場”とオフィスが一体となった状況のもと、机上の空論ではなく真剣に問題解決の方法を考える機会がもてました。ここでしか学べないことが沢山あったと思います。ありがとうございました。）

ご協力ありがとうございました。

若手技術者向け・フィールド参加型「地域課題発見・解決力」養成研修会
若手技術者 参加アンケート

平成 26 年 11 月 14 日からの 2 日間の研修、お疲れさまでした。

今回の研修の成果を、今後の活動につなげるためにアンケート作成にご協力ください。

なお、アンケート作成にあたっては、研修中に使用した資料等を参考にお答えください。

回答者：竹 翔太郎

チーム名：A チーム、B チーム、C チーム（参加チーム名を囲んでください）

質問 1：検討の対象となった「奥雲仙田代原」について、チームで扱ったテーマ上の課題についてわかったことをご記入ください（箇条書き）

- ① 田代原（遊々の森）が知られていない（地元の見沼町の人でも知らない人がいる）
- ② 「遊々の森」の中で安心して利用できるエリアがはっきりしていない（ダニの問題等）
- ③ 「遊々の森」を運営していくためのスタッフの確保ができていない
- ④ ミヤマキリシマ や ヤマボウシ などが 減って きている。
- ⑤ 草や木が 手入れ できておらず、人が 進入 できない
- ⑥ 「遊々の森」が 雲仙国立自然公園 第 2 種 特別区域 に 指定 されておらず、整備 に 制約 がある
- ⑦ 「遊々の森」の 活用 方法 が 地元 の 人 の 中 で は っきり して いない。

質問 2：質問 1 の課題の中で、地元の方との話し合いの中でわかった課題、地元の方の意見がなければ浮かび上がらなかった課題はありましたか。その課題と、地元の方の視点について気づいたことをご記入ください。（質問 1 の該当する課題番号を記載し、その欄に記載ください）

(番号) ①

記入欄 「田代原(遊々の森)という名前が知られていない」という課題

「地元の方の視点について気づいたことは、地元の方は活動はしたいが、実際にどこから手をつければ良いか分からないということ。」

質問 3：地域課題を発見するために、大切なこと、必要なことをご記入ください（箇条書き）。

- ・ 相手のどんな小さな意見でもしっかりと聞く。
- ・ 地元の方が主体となり問題点を挙げていく。
- ・ 相手の意見についての自分自身の答えをはっきりと述べ、討論する
- ・ 実際に課題のある対象地域を訪れる
- ・ ある程度、地域のことについて下調べしておく。
- ・ PCM手法などの手法を使用し、スムーズに協議を進める

質問4：質問1で記入いただいた課題の解決方策について、今回の研修期間のなかで考えた対応方法を記入ください。（質問1の番号と対応して、課題の番号の欄に記入ください）

(番号) ①②③ 記入欄

- ① 小さな取組みなどからコツコツと進め、口コミで少しずつ田代原を知ってもらう
- ② 丹念の活動時期を考え、活用できるエリアを時期で変えていく。
- ③ 地元の人々のネットワークを広げるために、色々なイベントに地元の人々が参加する
- ④ 草刈りなどで手入をし、ミヤマキリシマやヤマボウシが成長しやすい環境を整える
- ⑤ 地元の人々のネットワークを広げ、ボランティアの人を確保し、草刈りなどをを行う。
- ⑦ 落葉でけり絵をしたりと自然の物を使用した「ふ遊心体験」ができる場として「遊々の森」を活用していく。

質問5：課題解決策を見つけるために、大切だと思われることをご記入ください。（箇条書き）

- ・ 地元の人々のどんな意見でも耳を傾ける
- ・ 地元の人に意見を出してもらい、出てきた意見をみんなできり下げっていく。
- ・ 課題の中心となる問題点をはっきりとさせる。
- ・ PCM手法 などの手法を身につけておく。
- ・ 外部からまた人の意見を聞く。

質問6：今回の研修会を通して感想をお聞かせください。（該当する番号を丸で囲んでください）

質問6-1：今回の研修は、コンサルタント技術を向上するという観点で役に立ちましたか？

- ①たいへん役に立った ②役に立った ③あまり役に立たなかった ④その他
その他等意見（)

質問6-2：あなたの周りの技術者の方に、来年度の参加を勧めますか？

- ①積極的に参加を勧める ②勧める ③あまり勧めない ④その他
勧めない理由その他等意見（)

質問6-3：今回の研修は、1泊2日で行いましたが、時間配分はいかがでしたか？

- ①もっと長いほうがいい ②ちょうどいい ③長すぎる ④その他
その他等意見（)

質問6-4：その他今回の研修に関する全般的な意見等

（もう少し地元の人との交流する時間が欲しかった。）

ご協力ありがとうございました。

**若手技術者向け・フィールド参加型「地域課題発見・解決力」養成研修会
若手技術者 参加アンケート**

平成 26 年 11 月 14 日からの 2 日間の研修、お疲れさまでした。
今回の研修の成果を、今後の活動につなげるためにアンケート作成にご協力ください。
なお、アンケート作成にあたっては、研修中に使用した資料等を参考にお答えください。

回答者 : 濱崎 瑛貴 (氏名をご記入ください)
チーム名 : A チーム、B チーム、C チーム (参加チーム名を囲んでください)

質問 1 : 検討の対象となった「奥雲仙田代原」について、チームで扱ったテーマ上の課題についてわかったことをご記入ください (箇条書き)

- ①当該地域までは目的地が分かりづらい上に時間がかかる
- ②地域産の農産物が地域で活かされていない
- ③資源はたくさんあるが、外部にあまり知られていない、伝わっていない
- ④資源に付加価値がない
- ⑤地域を引っ張っていくリーダー的な存在がない
- ⑥行政の一体感がない
- ⑦

質問 2 : 質問 1 の課題の中で、地元の方との話し合いの中でわかった課題、地元の方の意見がなければ浮かび上がらなかった課題はありましたか。その課題と、地元の方の視点について気づいたことをご記入ください。(質問 1 の該当する課題番号を記載し、その欄に記載ください)

(番号) ⑤⑥

記入欄

資源がたくさんあるのになぜ自分はあまりこの地域についてあまり知らないのだろうと感じていたが、地域に意欲的な方がちらほらといても、その方たちをまとめる役の人がいない、またそれぞれの地域をまとめる力、意欲が行政に欠けているが問題だと感じた。また、そのために外部に情報を発信していくことが個人個人では難しくなっている、そのサポートもないのが課題であると考えた。

質問 3 : 地域課題を発見するために、大切なこと、必要なことをご記入ください (箇条書き)。

- ・ 地域を歩く、地域の人と交流する
- ・ 相手が当然だと感じていることにも地域の課題が隠れている
- ・ 自分は外部の者として、地域に対して率直な意見を述べる
- ・ 地域に存在する小さな問題でも、何故そのような問題が発生しているのか聞き出す

質問4：質問1で記入いただいた課題の解決策について、今回の研修期間のなかで考えた対応方法を記入ください。（質問1の番号と対応して、課題の番号の欄に記入ください）

(番号) ①②③・・・・・・・・・・・・・・・・・・記入欄・・・・・・・・・・・・・・・・・・

- ①「奥雲仙田代原地域」に魅力を持たせる。（中田さんがリーダーとなり）
- ②魅力を備えた「奥雲仙田代原地域」に来訪してもらうために、ウォーキングイベント等のイベントを開催する。
- ③その際には、田代原への一本道である県道131号線を軸として、その沿線の商店に特産物を使った商品を展開して、共通のポイント特典を付与してもらうようにして、地域として一体となる。
- ④その集客効果を雲仙の他の地域に波及させる。

質問5：課題解決策を見つけるために、大切だと思われることをご記入ください。（箇条書き）

- ・地域の特色を生かす解決策を見つける
- ・地域の方の「意欲」に、私たちがソーシャルファウンデイン等実現に向けての「知恵」を提供する

質問6：今回の研修会を通して感想をお聞かせください。（該当する番号を丸で囲んでください）

質問6-1：今回の研修は、コンサルタント技術を向上するという観点で役に立ちましたか？

- ①たいへん役に立った ②役に立った ③あまり役に立たなかった ④その他
その他等意見（ ）

質問6-2：あなたの周りの技術者の方に、来年度の参加を勧めますか？

- ①積極的に参加を勧める ②勧める ③あまり勧めない ④その他
勧めない理由その他等意見（ ）

質問6-3：今回の研修は、1泊2日で行いましたが、時間配分はいかがでしたか？

- ①もっと長いほうが良い ②ちょうどいい ③長すぎる ④その他
その他等意見（ ）

質問6-4：その他今回の研修に関する全般的な意見等

- ・現地を見る時間が少なく感じた
- ・今回で言えば長崎大学など、近くの大学生にも参加してもらえれば貴重な意見が聞けるかもしれないと思った

)

ご協力ありがとうございました。

(参考資料)

PCM手法の概要とグループワークの進め方

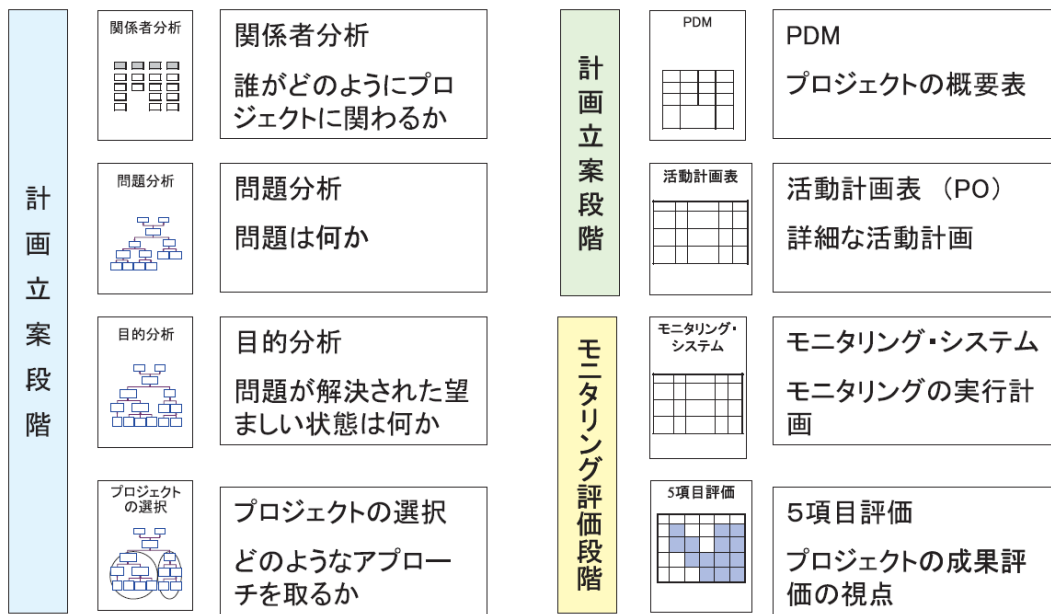
1) PCM手法の概要

今回の研修は、PCM（プロジェクト・サイクル・マネジメント）手法をなぞったワークショップ形式で行います。

PCM手法は、FASID（国際開発機構）が、国際的な開発援助プロジェクトの立案・運営・管理能力を有する人材を養成するために採用している手法です。PCM手法では、開発援助プロジェクトの計画・実施・評価という一連のサイクルを「プロジェクト・デザイン・マトリックス（PDM）」と呼ばれるプロジェクト概要表を用いて管理運営します。

（下図参照。PCMの詳細は別資料に。）

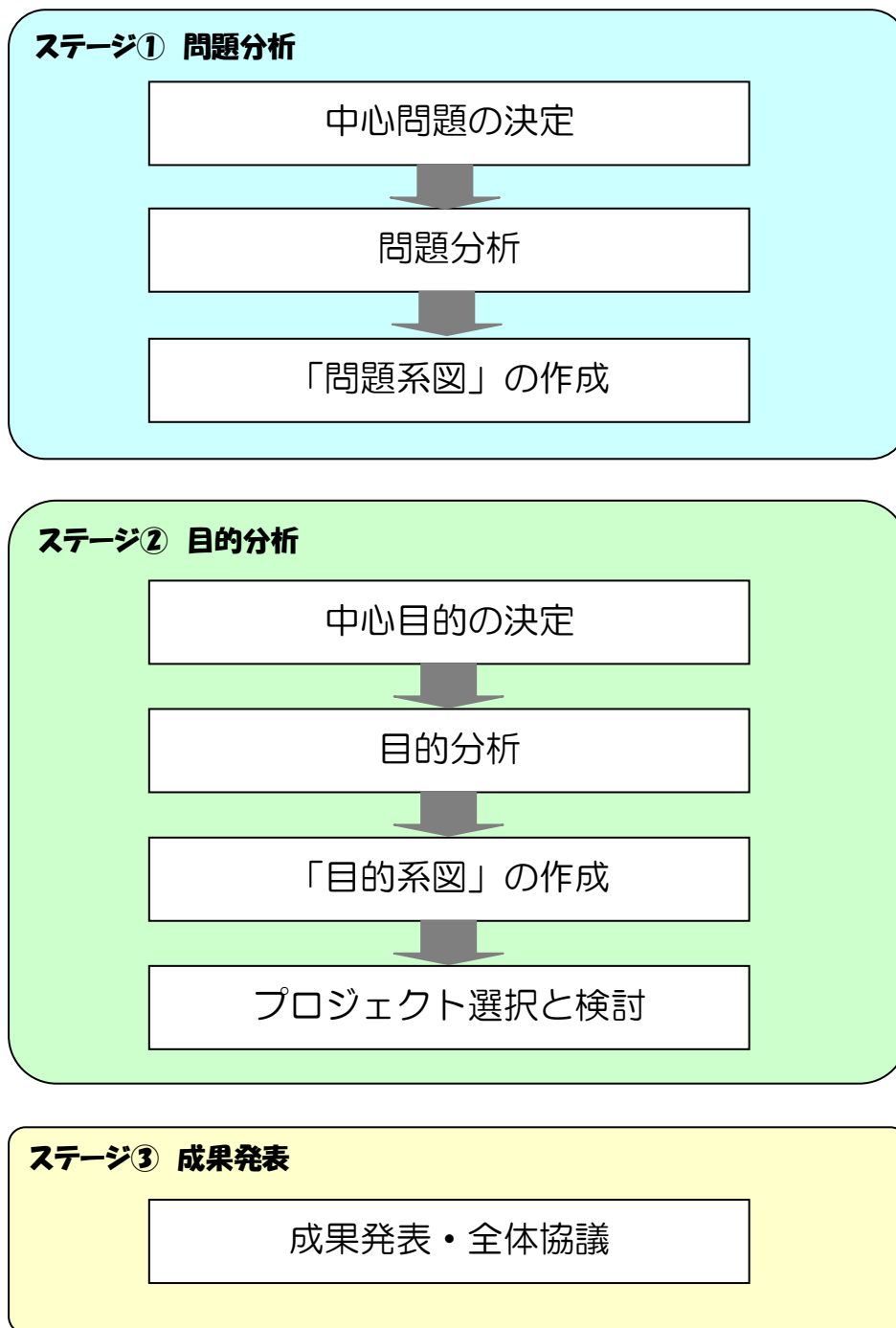
図 A3 - 1 PCM手法の全体構成



（FASID「PCM手法の理論と活用」より）

2)グループワークの進め方

グループワークでは、このPCM手法に沿って以下の手順で作業を行います。



●グループワークでの役割

グループワークは、チーム内の進行役のリードにより話し合いと意見整理で進めていきます。

若手技術者には、**チームの進行役と記録係**（意見をポストイットに書き出し、整理）を担当していただきます。参加者みなさんから意見を引き出し、奥雲仙地区の問題の洗い出し及び必要なプロジェクトの提案を行ってください。

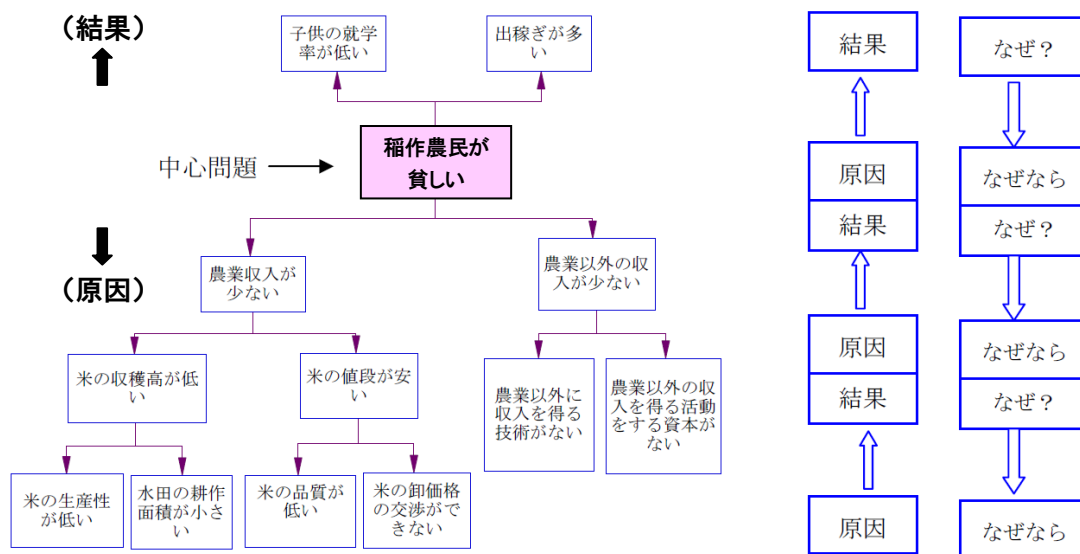
奥雲仙地区のことをよく知っている共助研メンバーが、進行を補佐します。

3)ステージ①問題分析

●問題分析の方法

1. チームテーマについて「気になること」を発表する。
 - ⇒メンバー全員が、ポストイットに1~2項目書き出し、発表する。
 - ⇒地元住民は、日頃から感じていること。
 - ⇒若手参加者・共助研メンバーは、外から見て感じたこと。
2. 「中心問題」を決めて、白紙の真ん中に貼る。(赤のポストイット)
 - ⇒全員が発表したら、項目の種類や共通点等を話し合い、「中心問題」を決める。
 - ⇒「中心問題」を赤のポストイットに書き出し、白紙の真ん中に貼る。
3. 「中心問題」が起きている「原因」を話し合う。(「中心問題」の下半分に配置)
 - ⇒若手は、一人が進行役、一人がメンバーの意見をポストイットに書き込み、白紙に貼る。
 - ⇒進行役は、「中心問題」を引き起こしている「原因」を、メンバーから聞き出す。
 - ⇒意見はどんなささいな意見であっても拾い上げ、ポストイットに簡潔に書きとめる。
 - ⇒出された意見については、類似意見は寄せて配置し、また意見間の関係も整理して、中心問題の下半分に配置する。
4. 「中心問題」から引き起こされている「結果」を話し合う。(「中心問題」の上半分に配置)
 - ⇒「原因」と同様に「結果」について意見を聞き、ポストイットに簡潔に書きとめて、中心問題の上半分に配置する。
5. 「問題系図」を完成させる。
 - ⇒問題の原因、結果について十分に話し合う。
 - ⇒「原因」と「結果」相互の関連性、詳しい内容、不足が無いかな等を確認して「問題系図」を完成させる。

問題分析の例



4)ステージ②目的分析

●目的分析の方法

1.前日の「問題系図」を確認する。

- ⇒進行役が「問題系図」の概要を読み上げて、前日の話し合った内容を確認する。
- ⇒内容の追加や修正などについて、意見を聞く。

2.「中心目的」を決める。(緑のポストイット)

- ⇒問題系図の中心テーマや最も関心の高かった問題を選び、肯定の表現で目的系図の「中心目的」とする。(必ずしも中心問題の裏返しでなくても良い。)

例えば、「交通事故が頻繁に起こる」→「交通事故が大きく減少する」

- ⇒「中心目的」を緑のポストイットに書き出し、白紙の真ん中に貼る。

3.「問題系図」の「原因」を参考にしながら、「中心目的」を解決する「手段」を話し合う。(「中心目的」の下半分に配置)

- ⇒「問題系図」を参考にしながら、中心目的の解決手段(原因の裏返し)についてメンバーから聞き出す。
- ⇒意見はどんなささいな意見であっても拾い上げ、ポストイットに簡潔に書きとめる。
- ⇒出された意見については、現実的かどうか、マイナスの影響が出ないかどうかを確認し、中心目的の下半分に配置する。

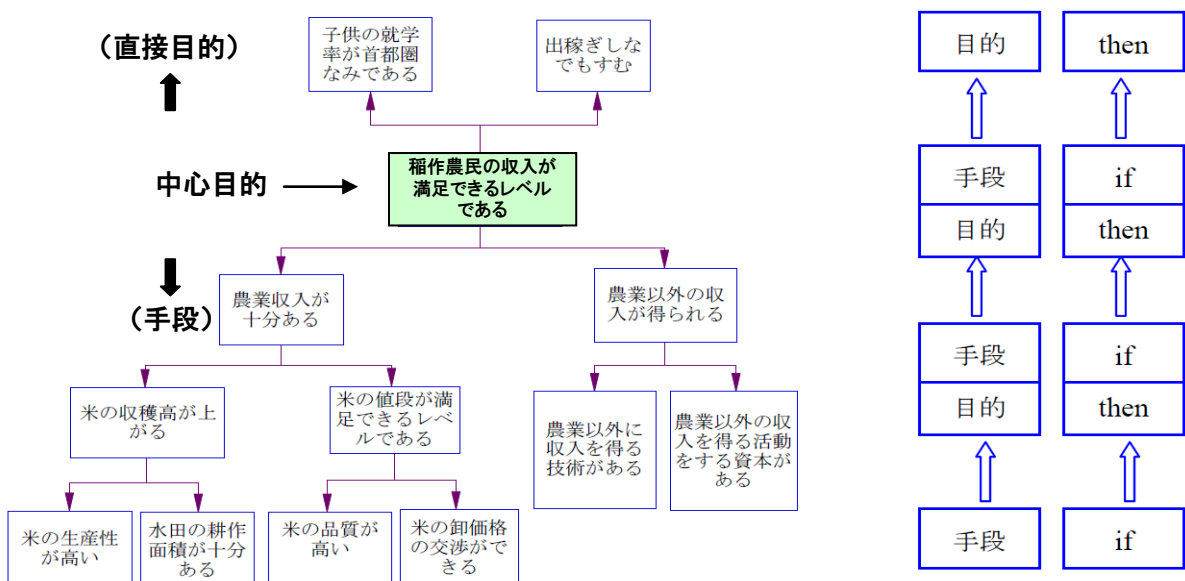
4.「中心目的」から導かれる「直接目的」を話し合う。(「中心目的」の上半分に配置)

- ⇒「問題系図」を参考にしながら、中心目的から誘引される「直接目的」(結果の裏返し)について意見を聞き、ポストイットに簡潔に書きとめて、中心目的の上半分に配置する。

5.「目的系図」を完成させる。

- ⇒「手段」と「直接目的」について十分に話し合う。
- ⇒特に、「手段」については具体的な手段がわかるレベルまで話し合い、「目的系図」を完成させる。

目的分析の例



5) ステージ②の続き・プロジェクト選択

●プロジェクト選択の方法

1. 「目的系図」から、プロジェクトを確認する。

- ⇒「目的系図」のなかで、プロジェクトの原型を構成している範囲を線で囲む。
- ⇒線で囲んだ範囲それぞれについて、それらが目指す目的と戦略を確認する。
- ⇒プロジェクトとして不適切なもの、実施が困難なものを確認し、対象から除外する。

2. 重要なプロジェクトを1～2選定し、その具体的な進め方を整理する。

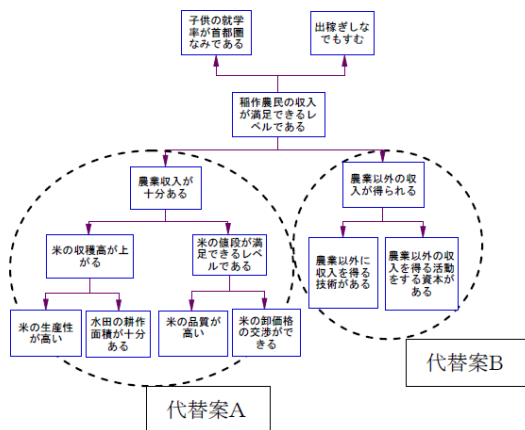
⇒選定したプロジェクトについて、以下の項目を話し合う。

- ・プロジェクトが対象とするモノ・人・コトは。
- ・対象をどうしていくか。(目標と指標)
- ・誰が主体となって行うか。
- ・奥雲仙地区としての体制をどうするか。
- ・規模・範囲は妥当か。
- ・手順をどうするか。
- ・マイナスの影響はないか。
- ・目標が達成されると、奥雲仙地区はどう変わるか。

⇒プロジェクトを、白紙にまとめる。(名前・目標・内容・体制等)

プロジェクトの選択の例

代替案を線で囲む



代替案を比較検討する

	代替案A	代替案B
ターゲット・グループ	稲作農民 2700人	稲作農民の一部 約1500人
受益者のニーズ	非常に高い	高い
政策的優先度	非常に高い	高い
必要な資源	稲の新品種 普及員 灌漑施設	資本金 小規模事業指導員
費用	大きい	中くらい
費用便益比	大きい	中くらい
技術的難易度	中くらい	中くらい
達成可能性	高い	中くらい
リスク	中くらい	中くらい

6) ステージ③・成果発表

- 発表者：若手技術者＋地元住民
- 発表時間：10分
- 発表スタイル：自由。「問題系図」や「目的系図」、プロジェクトまとめ等を使って。
- 質問等：他のチームから質問・意見を受ける。5分程度

晩秋のいろどりみごと 雲仙の 赤くぞやまの かがやきており

詠み人：針貝武紀



「遊々の森」の色づく大紅葉 若手研修生の大きいなる成長を期待して

報告書とりまとめ責任者：矢ヶ部輝明
(6章：木寺佐和記、7章：波木健一が担当しました)